
ウィザード・テイルズ

T S U K A S A

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ウィザード・テイルズ

【Nコード】

N0003Y

【作者名】

T S U K A S A

【あらすじ】

年^{フアリッサ}に一度、ここ天界ではある闘いが始まる。

その闘いに参加するのは人間界の中学生。

そしてここにも一人その闘いに無謀に挑戦する者がいた。

しかし、それは何かの手違い？

間違っ^{フアリッサ}て連れてこられた、闘うには不向きな主人公。

今までの生活が180度変わってしまった主人公。

どこか弱気な主人公。それでも主人公！

様々な魔法が飛び交うファンタジーな物語。

プロローグ

気が付けばそこは知らない場所だった。

草原の中、僕の後ろには大きい湖があった。

そして目の前には知らない2人組の男女。何か変な格好をしている。全身を紅く包むローブに背中には金の十字架が模様がある。

もう一人は蒼いローブで同じく背中に金の十字架の模様がある。

その二人の男女は歳は………18くらいだろうか。女性の方は金髪
のポニーテールで赤いリボンをしてい
て目の色は透き通るような綺麗な緑色で肌は白かった。

男性の方は黒の短髪で赤い目をしていた。

しかしその目はやがて点になり呆けていた。そして女性の方がプル
プル震えだし下を向きもう一人の男性へ話しかけた。

「さうてクロード、あたしの質問に正確に答えてね」

「あ、ああ」

クロードと呼ばれる男性は汗を流しながら答える」

「では質問その1。あたしたちが連れてくるべき子の名前は？」

「佐藤 龍一だ」

龍一！？何で龍一の名前が出てきたんだ？この人たちは一体……。

「そうね、じゃあ質問その2。この少年の名前は？」

僕のことだろうか？男性がこちらを覗き込むように見ると……

「荒川 悟だな」

「!!!!!!!!!!」

何で！？僕の名前が……この人は僕の何を見たって言うんだ。

「そうね、じゃあ最後の質問ね。一度天界に連れて来られた子供はどうなるの？」

「そうだな……一度連れてきたら変更はできねえな。勿論、人間界へ返す事も……」

天界？人間界？この人たちは何を言っているんだ。帰ることができない？そんな……僕はついさっきまで学校に居たのに何でこんな所に

時は数時間前にさかのぼる僕が友達の龍一を見つけて声をかけようとした時だ。何も無い空間からいきなり手が伸びてきて僕は捕まり気が付けばここにいた。

プロローグ（後書き）

初めての人もそうでない方もいるでしょうか？TSUKASAです。
魔法の世界のファンタジーです。弱気な主人公がどんどん強くなっ
ていくところを見ていってください！感想待ってます！

それが僕の世界が変わった日の始まりだった

僕の名前は荒川 悟。今日から中学1年生になる普通の男子だ。

「おっす！悟、何だ？元氣ねえじゃん、俺ら今日から中学生だぜ？」

僕の肩を後ろから叩いて声をかけてきたのは、小5からの親友、佐藤 龍一だ。龍一とは小5の時に同じクラスで初日に隣の席になり仲良くなった。6年生の時は別のクラスになったけど、登下校は龍一と歩いている。他にも友達はいるけど、やっぱり龍一が一番仲がいい。

「ふぁー朝から元氣だね龍一。僕、不安で緊張して眠れなかったんだ」

実を言えば僕は龍一が友達になるまで小学校の頃は一人でいる事が多かった。友達を作るのが苦手だったんだ。それができるようになったのも龍一のおかげだけど、やっぱり中学に入ると知らない人がいっぱいいる。不安が捨て切れなかった。

「もっと喜べよ悟！やっと俺ら中学生になったんだ！楽しい事がいっぱいあるじゃねえか！部活に勉強体育祭に修学旅行に文化祭。小学校じゃどれもショボかったけど中学では全然違うんだ。それに俺は将来は偉い弁護士になるんだ！」

そうだ龍一が初めて会ったときから言っていた言葉だ。やっぱりすごいなあ龍一には夢があつて。

「なれるよ龍一なら。なんたって君は小学校の頃から、成績優秀・スポーツ万能で……おまけに女子にはモテるし」

「そうだっけ？」

どれに疑問を抱いたのかは分からないがどれも間違つてはいないはずだ。テストの時にはほとんど満点だったし、マラソン大会の時には毎回1位。友達になる前から龍一は有名で僕も少し憧れていた。バレンタインの日には引出しや、ランドセル、靴箱の中にまで一杯ぜんになっていて本人は迷惑がっていたけど一部の複数の男子からは羨望と妬みの眼差しが記憶に残っている。

「僕なんて得意なことと言えばコントロールの良さくらいかな……」

「確かに悟ってコントロールだけは一番だったよな」

そう、僕が一つだけ得意としていること。それは物を投げるときのコントロールの良さだ。これだけは誰にも負けない自信があつた。それがきっかけでリトルの少年野球チームに一時期は入っていたが、

体力がもたず、すぐにやめてしまった。

「悟は野球部には入らないのか？俺はサッカー部に入ってみようと思うんだ！野球が嫌なら一緒にサッカー部に入らねえか？」

「うーん……龍一と一緒にいいかな。何か野球部って厳しそうなイメージあるし、サッカーもやってみたいかも」

龍一となら頑張れるかもしれない。僕は心の中でそう思った。

そしてしばらくその場で喋っていると周りの生徒が走り出した。予鈴のチャイムが鳴ったんだ。

「やっべ！急いで体育館まで急ぐぞ悟！初日から怒られたくないからな」

「うん！」

そして僕と龍一は走り出した。

それが僕の世界が変わった日の始まりだった。

それが僕の世界が変わった日の始まりだった（後書き）

主人公は大抵の事が人並み以下のひ弱な感じですがコントロールが良いつていう部分だけって主人公っぽいですかねえ？主人公の長所を生かしてだんだん格好よくしていきたいと思います。感想待ってます！

な、友達なんてすぐできんだろ？

体育館へ入り学校別に並べさせられた。僕は龍一の隣へ座り、先生達の話を聞いていると次第に眠くなりウトウトしていると。

「では新入生代表で佐藤 龍一君！前へ出てきてください」

「はい！」

龍一の名前が出てハッと目を覚ました。新入生代表？すごいなあ龍一は代表にまで選ばれるなんて。

龍一は立ち上がり校長先生らしき人の所まで歩いていく。そこで代表としての挨拶をした。……挨拶が終わると拍手が広がった。勿論僕も思いつき手を叩いた。

入学式が終わり、1年生校舎へ向かう僕と龍一。そこでクラス分けの張り紙があった。

「クラス………違うね」

「ああ、残念だったな」

僕は5組、龍一は3組だった。

「俺、荷物置いたら悟のクラスに行くよ！」

歩きながら龍一がそう言ってくれた。

「うん！ありがとう！」

そうだ、別に会えない訳じゃないんだ。僕は安心した。そしてお互いのクラスに入り席に着いた。

席に着いたのはいいけど……早速何をすればいいだろう。周りは知らない子ばかりだ。もう何人かは友達と話をしている。

(……やっぱり出遅れてしまった。どうしたらいいんだろう)

そんな事を考えながらボーっとしていると。

「さ〜とる〜！」

廊下の方から声が聞こえた。龍一？声はするけど姿が見えてこない。

廊下へ出てみるとすでに何人かの生徒に囲まれながら少しずつ歩を進めてくる龍一の姿があった。

「……龍一！」

龍一がこちらに気付き手を振り返す。そのせいか自然と周りの人が離れる。

「さっそく人気者だね龍一は」

「お前もすぐできるよ、みんないい奴ばっかだし」

「そうかな？」

そんな会話をしていると、一人の男子が僕に声をかけてきた。

『君、佐藤君の友達？』

「友達って言うか…親友だな！荒川 悟だみんなも仲良くしてくれよな！」

先に龍一が応えた。その言葉にみんなが驚く。

『え〜！親友って事は、佐藤君の事とか何でも知ってるの！？』

男子だけではなく女子にも詰め寄られた。こういうのは初めてだ。

「え？まあ多少は……」

「悟ってなコントロールがすごくいいんだぜ！」

龍一がさらにかぶせてくる。まあそれはホントの事なんだけどね。

『え〜！！マジかよ！？俺、野球部に入るんだけどよかったら一緒に入らないか？』

坊主刈りの男子の顔が近くなる。えっと……………

「ぼ、僕は龍一とサッカー部に……」

『そっかゝまあそれじゃあ仕方ないな』

坊主刈りが落胆する。何か悪い事しちゃったなあ。

『ねえ小学校の頃って佐藤君、どんなだったの？』

「え、えっと」

僕はいろんな人に質問攻めに遭い龍一の方に視線を送った。

（な、友達なんてすぐできんだろ？）

龍一が笑いながら僕にそう言っているように思えた。

（うん！ありがとう！龍一）

僕も心の中でそう思った。そしてこの時はまだ知る由も無かった。まさか、あんな事になるなんて。

な、友達なんてすぐできんだろ？（後書き）

龍一はひたすらに格好いいです！！それにめっちゃいい奴！このまま悟と龍一の楽しいスクールライフが始まれば良いんですけどね。次回からそうもいかなくなります。感想待ってます！

いくら全てが良くたって……顔がダメなら却下!!

悟が龍一のクラスメイトと仲良く会話をしている。その人間界とは別次元の天界では……。

「ねえ『クロード』、今日だね。あたし達が担当する人間界の入学式って」

何も無い草原で金髪ポニーテールで緑目の女がもう一人の男へ問いかける。

「ん？ ああそうだったな」

クロードと呼ばれる黒髪短髪で赤目の男は肘を付き横になりながら応えた。

「そろそろ探しに行かないと時間に間に合わないんじゃないの？ あと1時間くらいだよ」

「……………ん？」

クロードはポケットにしまってあった銀時計を開く。

「ぬぁ！？まずい！早く行くぞ！」

「だうからさっきから早く行こうって……………」

おんなは振り向くとそこにクロードの姿は無かった。

「あゝいゝつゝ。この『シュレイナ』様を残して先に行くなんていい度胸してるじゃない」

シュレイナは立ち上がり遠くの方にいるクロードを追いかけた。

「待てゝ！」

ゝ場面変わり北の湖ゝ

ここは北の湖。天界から人間界を除く事ができる場所。

「ハア、やっと着いた」

クロードは息を整えながら周りを見渡した。他の天界人の姿はみえない。

「あとは、俺らだけか」

そこへシュレイナが追いついてきた。

「いきなり走り出さなくてもいいでしょクロード！」

そしてシュレイナも天界人は自分達しかいない事を確認する。

「……あたし達だけね。ちょうどいいわ、他の奴らに情報が伝わることも無いし」

「とにかく、早く人間界から一人選んじまおうぜ。ホントに時間が無くなる」

クロードが湖の近くまで行きシュレイナをせかす。

「ちょっと待ちなさいよクロード！ あんた今年からなんでしょ？ ただ誰でもいい訳じゃなくって……」

シュレイナが途中まで言いかけたところをクロードが続ける。

「わかってるさ、頭がよかったり、体力のある奴を探すんだろ？」

「そう、後は精神力もね。私達、天界人の持つ天眼で人間を見ると、その人間の頭の上に名前とその人間の『体力・知力・精神力』が表示されるの」

「ふーん………ホントだあいつは『体力40・知力70・精神力45』か……」

クロードが珍しそうに見ていると。

「ちょっとそんな子選ばないでね。確かに知力は高いけど、他が半分以下じゃない、人間界でいうガリ勉って奴ね。顔がそんな感じだもん。もっと全体的にいい子じゃないと……」

「でもそんな人間がいたらとくに連れて行かれてるだろ」

クロードの意見にもっともだと言わざるをえない顔をしているとシュレイナが湖に映る人間達を見て、一人の男子に目が留まった。

「あゝ！」

いきなり叫ぶシュレイナにクロードが振り返る。

「何だよ！いきなり、そんなにびっくりするほどの奴がいたのか？」

「そのまさかよ、私も何人もの人間達を見てきたけど……この子は別格だわ」

「どれどれ………何ゝ！？」

クロードもその子供をみて後ろに退いてしまった。

「た、体力95・精神力90・知力100！？こんな人間が存在するのかわよ？」

「ま、いるんだからいいじゃない？」

シュレイナはすぐに平静を取り戻した。

「よし、それじゃあこいつを……」

クロードが湖に手を伸ばすと。

「ちょっと待ちなさい、よ！」

バコッ!!

シュレイナが小型ハンマーを取り出しクロードを殴った。

「ってゝな！何すんだよ！？大体どっから出したそのハンマー！」

「細かい事は気にしないの……それよりも大事なことがあんのよ」

シュレイナがハンマーを後ろに隠しながら言う。

「何だよ？大事な事って……」

シュレイナが一度、後ろを向く。そして振り返りながら……

「……………顔よ！」

クロードが一瞬こけそうになる。

「お前なく時間が無いんじゃないのかよ？」

「いくら全てが良くなったって……顔がダメなら却下！！」

「こりゃもうダメだな……」

クロードが呆れている次の瞬間にその子供がシュレイナの見える位置に振り返った。

「……………え？」

いくら全てが良くなったって……顔がダメなら却下!! (後書き)

ちよつと長くなってしまいましたね(汗) ちょうどキリのいいところが無かったもので……シュレイナが見つけたあの子。みなさんは分かりますよね? という事はその顔も。しかし次回はシュレイナが暴走し大変な事になります。

感想待ってます!!

……悟が頭の中から消えていた。

湖に映っている子供が振り返りクロードもその顔を見た。

「ふーん……まあ別に普通なんじゃないか？　どうなんだシュレイナ」

クロードがシュレイナに問いかけるとシュレイナはボーっとしていた。

「……………えー？　……そ、そうね……い、いいんじゃない？」

シュレイナはやけにあわてていた。

（なによ！　結構いい感じの子じゃない。あの子に決定ね！）

「えーっと、佐藤 龍一かあそんじゃあこいつでいいんだな？」

「他にどの子がいるって言うのよ！　早くしなさい！　湖に手を入れたらそのまま人間界に通じてるからそのまま掴んで引き上げればいいのよ！」

「とは言ってもなあ、周りに人間が多すぎるんだよ。もう少し待ってからでいいだろ？」

しかしシュレイナは両手を上げグーにして騒いでいる。

「ダメよ！今すぐに連れてきなさい！！」

その瞬間シュレイナの体の周りにロープが現れシュレイナの体に巻きついた。

「ちょっと、何すんのよ！？」

そのロープはクロードの出したものだった。

「悪いなシュレイナ、ちょっとそこでおとなしくしといてくれ。…さてと、じっくり待つとするか。あんまり時間も無いから早く一人になってくれよ？」

クロードが湖に映る龍一に言ってみる。当然、龍一には聞こえてはいない。そのころシュレイナは。

(……よし、後はこのナイフでロープを切れば……後で覚えときな

さいよゝ

一人黙々と袖口から出したナイフでロープを切っていた。そしてしばらくすると龍一の周りから人が少なくなる。

「よし、そろそろいいだろう、よっと」

クロードが湖に手を入れた。……と、同時にシュレイナのロープも切り終えた。

「おりゃゝ！クロード、覚悟！！」

シュレイナがクロードに飛び掛ろうとした。

「げ！？おい、ちょっと待てよ！」

ゝ場面変わり人間界の悟たちの学校ゝ

僕はホームルームのチャイムが鳴ったので各自の教室へ戻り、担任の話を聞いていた。

「明日の持ち物は……と……と……です！忘れ物をしないように。それでは今日はこれで終わりです各自これから自由行動です。部活の見学を試してみるのもいいでしょう。解散です！」

担任の先生が号令を告げると生徒達は各自帰り支度をした。

（龍一は部活の見学するのかな）

僕は龍一のクラスに行ってみたがそこには龍一はいなかった。

「どこいったんだろ？」

とりあえず靴を履き替えて校舎の外に出てみる。また他の生徒に囲まれてるのかな。

「おい！さ〜と〜る〜！」

遠くから龍一の声がした。振り返ると龍一が走ってこっちへ向かって来ていた。

「あ！龍一〜！」

次の瞬間、制服の襟首を掴まれた感じがした。

「……………え？」

そして周りの生徒達の動きが止まり。辺りの風景が灰色一色になった。

（何だこれ！？僕以外がみんな止まってる……………何かに後ろから掴まれている）

首だけ後ろに動かして見ると、そこには何も無い空間から手が出てきて僕の襟を掴んでいた。次の瞬間すごい勢いで引っ張られて目の前の風景が真っ白い空間に変わった。

「うわあああああ！！」

そして悟は人間界から消え、何事も無かったかのように時間が再び動き出した。一方龍一は、

「えーっと……………誰を見つけたんだっけ？あれ？思い出せない……………」

……
……
悟が頭の中から消えていた。

……悟が頭の中から消えていた。（後書き）

何の手違いか、悟が連れて行かれてしまいました。でもこれでいいんです。残念ながら龍一の出番はここで終わりになってしまいました。ごめんなさい。

物語はプロローグからになります。感想待ってます！！

僕が……魔法使いに!?

「天界の北の湖にて」

シュレイナがクロードに飛び掛りクロードはすでに湖に手を入れていた。しかしシュレイナをもう片方の手で制しながらだったのでほとんど手探りである。

「ちょっと待ってってシュレイナもう少しなんだ!」

「そんなモン知るかあ! よくもシュレイナ様を……ただじゃおか
ないんだから!」

そんな時にクロードの手が何かを掴んだ。

「お、こいつは!」

そしてその手を勢い良く引っ張ると……

ザッパッン!!!

湖から一人の男の子が引き上げられた。

そしてその男の子を見ると。

「「……………誰？」」

2人の声が重なった。

（悟の視点）

僕はいつの間にか真っ白な空間を何かに引っ張られていた。

（何だよこれ！？）

そして眩しい光が見えてくる。何処へ繋がっているんだろう？

……………目を開けるとそこには、ずっと草原が広がっていてすぐ後ろには湖があった。そして目の前には見知らぬ男女がいた。2人とも全身を包むローブを着ている。女性の方は紅く背中には金の十字架の模様で男性の方は蒼く同じく背中に金の十字架、歳は2人とも18くらいだろうか。

そして女性の方が男性の方に話し始めた

「さくろクロード。あたしの質問に正確に答えてね」

「あ、ああ」

クロードと呼ばれる男性は汗を流しながら答える」

「では質問その1。あたしたちが連れてくるべき子の名前は？」

「佐藤 龍一だ」

龍一！？何で龍一の名前が出てきたんだ？この人たちは一体……。

「そうね、じゃあ質問その2。この少年の名前は？」

僕のことだろうか？男性がこちらを覗き込むように見ると……

「荒川 悟だな」

「!!!!!!!!!!」

何で!?! 僕の名前が……この人は僕の何を見たって言うんだ。

「そうね、じゃあ最後の質問ね。一度天界に連れて来られた子供はどうなるの?」

「そうだな……一度連れてきたら変更はできねえな。勿論、人間界へ返す事も……」

天界? 人間界? この人たちは何を言っているんだ。帰ることができない? そんな……僕はついさっきまで学校に居たのに何でこんな所に

「あ、あの」

僕は恐る恐る声をかけてみる。

「ん? 何よ」

女性の方が振り向いた。

「ここは一体何処なんですか？僕はさっきまで学校に居たのに」

できることなら今すぐ帰りたい……すると女性の方がため息をついた。

「はあゝゴメンね。そこにいる『馬鹿！』が間違って君を連れてきちゃったのよね。」

あ、あたしの名前はシュレイナでこいつはクロード」

シュレイナと名乗る女性はクロードという人を何度も蹴っていた。

「さっきも言ったけど君にはある事をしてもらうまで人間界には帰れないから」

「……ある事って？」

「そうね、まずこの世界の名はファリツサ。ここで年に一度行われウィザード・ストウラゴる魔法使いの闘いってのがあるの。あなたみたいな人間界の子供達がウィザードって言う魔法使いになって闘ってもらわ」

僕が……魔法使いに！？

僕が……魔法使いに!?(後書き)

シュレイナやクロードの外見の詳細はプロログで紹介しているの
でここでは省かせていただきました。忘れてしまった方は、お手数
ですがプロログをもう一度見てください!次回からは闘いのルー
ル説明が入るのでセリフばかりになるかもしれません(汗)感想待
ってます!!

っていうか負けるのが嫌いなよ!!

僕が魔法使いに?……そんなのなれるはず無いよ。だって僕は普通の人間なんだから。

「その闘いのルールなんだけど、毎年変わってるのよね。去年のは確かこのファリッサにある『藍色の玉を何個か持って帰ってくる』だったかな」

シュレイナが説明を終えると一つの疑問が生まれた。

「えっと、玉を集めるだけなのに何で『闘い』なんですか?」

「あんたも鈍いわね。さっきも言ったけど参加者は他にもいるのよ? なら必然的に奪い合いになるとは思わないの?」

シュレイナが呆れたように言う。

「それって何人くらいの人が……」

「そうね、ざっと100人以上はいると思うわ。その全てがあんたの敵よ!」

「ひゃ、100人!？」

一瞬気が遠くなりそうになった。

「そつ、しかも闘いは1度じゃないのよ。ルールは毎年変わるけど唯一変わらないこと。それは二回戦は一回戦の3分の1しか残れないの。残りは脱落よ。」

そんな、ただでさえ敵が多いのに、半分も残らないなんて。

「その、脱落した人はどうなるんですか？」

きつとひどい目にあうんだろうか？まさか負けたら死ぬなんて事は……

「人間界へ戻されるわ、記憶を抜かれてね」

「……え？」

光が見えたような気がした。そうだ、わざと負ければすぐにもとの

世界へ…………

「言っとくけど！わざと負けたら承知しないからね！」

帰れそうも無いかな。

「あたしは絶対負けられないの！っていうか負けるのが嫌いなものよ！！」

何その個人的な理由！？

「無理ですよ！僕が闘うなんて」

「そんなのやる前から、負けを認める奴があるか！」

シュレイナがすごく怒ってる。何でそんなに必死に？

「いやーシュレイナ、今回はホントにお前でもダメかもしれないぞ？」

「何だよ！？」

クロードの言葉に睨み返すシュレイナ。

「ごたごたしてて確認してなかったが、この悟ってやつ 능력値を見てみる」

シュレイナが僕を見る。そしてしばらく見た後に愕然とした。

「そんな……体力45・精神力40・知力40なんて……何で全て平均以下なのよ!？」

そう叫んだシュレイナの目は若干涙目だ。体力や知力って僕 능력だろうか。自分でも思っていたことだけどやっぱり低いなあ。

「ふんっ! まあいいわ。ちょうどいいハンデじゃない! このくらいの逆境、乗り越えなければ認めてくれないものね!？」

シュレイナが開き直った。認める? 一体誰に認めてもらうんだろう。

「ところでさ、えっと悟君だっけ? あんた特技とかはあるの?」

特技……特技かあ、強いて言うなら。

「こ、コンロールがいい事しか……」

その言葉にシュレイナの目が見開いた。何かあったんだろうか？

「へーコントロール。そう、じゃあ試しにこの小石を湖の上に浮いている葉っぱにぶつけてみなさい」

そう言うど僕にその辺にあった小石を渡した。あの葉っぱか……できなくはないかな。

小石を葉っぱめがけて投げてみる。小石は吸い込まれるように葉っぱに当たった。

「すごっ！」

クロードが思わず声を出す。そんなにすごいことなのかなあ。

「ほ〜。なるほどね」

シュレイナがニヤリと笑った。

「あんがい、イケるかもね」

不意にシュレイナがそんな事を言った。

っていうか負けるのが嫌いなよ!! (後書き)

悟の能力値とそれを補うかもしれないその特技。だんだんクロードのセリフが少なくなっているような気がします (笑) さあ次はいよいよ魔法ができてます! 皆さんが思ってるような魔法でしょうか? あまり期待はしないで下さい (汗)

感想待ってます!!

……大笑いしながら。

その後もシュレイナは何度か僕のコントロールを試していた。そんな時クロードがのんきな口調で言った。

「シュレイナ、後5分くらいだから俺は先に行くぞ？」

そう言って、クロードは立ち上がり呪文を唱えると足元から風が現れクロードを包み込んだ。

「ほんじゃ、先に行くぞ」

そしてものすごい速さでクロードは言ってしまい見えなくなった。

「まったくもう！何でいつもあたしより先に行くのよ！？ほら、あんたもボウツとしてないで行くわよ！」

そう言うとシュレイナは僕の腕を掴みさつきクロードが言っていた呪文を唱え始めた。

「大いなる風の下部よ『汝』なんじ我を目的の地へ導きたまえ！」

するとまた、足元から風が現れ僕ら2人を包み込んだ。

「うわわわわ！ちょっと！」

僕は何がなんだかわからなかった。

「ちょっと暴れないでよ！」

僕にはシュレイナの声は聞こえてなかった。そしてシュレイナが小型ハンマーを取り出すと……

「暴れるな！！！」

ゴッ！！

「……よし」

そのまま僕は目的地に着くまで気を失っていた。

（場面変わりとする会場）

目が覚めるとそこにはクロードやシュレイナのようなローブを纏まとった人が数え切れないほどいた。そしてよく見ると僕と同じくらいの子供も。

「お？ 気が付いたか」

「は、はい！」

どうやら僕はクロードの背中の上で眠っていたようだ。僕はとっさに背中から降りた。

「……あの」

僕が声をかけようとしたその瞬間、急に周りが暗くなった。

「いよいよ、始まるわね」

シュレイナがそんな事を言いながらある場所をジッと見つめている。他の人たちもだ。僕もそっちを見るといきなり火柱が立った。

「うわっ！」

僕以外の子供たちもみんな驚いているのに対しクロードたちは平然とその火柱を眺めていた。そしてその火柱の中から1人の老人が出てきた。ただの老人ではない。さまざまな装飾が施された立派な服に六芒星ろくぼうせいの模様が入ったマント、手元には長い杖を持っていた。

「えっと、シュ、シュレイナさん」

僕は初めてシュレイナの名前を呼んだやっぱり年上だし『さん付け』した方がいいかなあ

「あ、シュレイナでいいわよ、何？」

呼び捨てでいいのか、ちょっと勇気がいるなあ

「…………シュレイナ、あの人は誰？」

「あゝあの人は『グロツツ・ロベルト様』よ、200種以上の火・地・風・雷・水の魔法を使い中でも火の魔法は歴代のファリッサの王で最も強いと言われているの。毎年この魔法使いウィザード・ストウラゴの闘いの開会の儀で派手な魔法で出てくるのよ」

「ああ、確か去年はあそこに笑いながら雷に乗って来たっけな」

シュレイナの説明にクロードが補足する。そしてグロッツ様が喋りだした。

「あゝ皆の者よくぞ集まってくれた。そして選ばれし子供たちよ、慌てる事はない。すぐにパートナーと仲良くなれるじやろう。さて、今回は120名の子供たちに参加してもらおうわけじやが、まずはルールを説明する前に先ほど渡された箱があるじやろう、それを開けてみなさい」

グロッツ様がそいうと周りの人は手に持っていた赤い箱を開けた。勿論シュレイナも。

「その中に入っている石はわしが自ら用意した『火の石』じや。それを3つ集めて二回戦の会場へ来た40組が勝ちとなる。勿論、闘って石を奪い合うのじやが、今ではない。明日の正午からじや。それまで準備をしたり己を鍛えるのも良いじやろう、では諸君の健闘を祈る」

そう言い終えるとグロッツ様の周りを風が包み込んだがさっきのシュレイナの様な小さい物ではなく竜巻だった。その竜巻に飛ばされそうになっている人もいたが、グロッツ様は竜巻とともに天高く舞い上がって言った。

「あっはっはっはっは」

………大笑いしながら。

「本っ当に派手な人だねえ」

シュレイナは頭に手をやり呆れながら会場を出て行こうとしたので僕とクロードも後につづいた。

……大笑いしながら。(後書き)

グロツツ様はとても陽気なおじさんです(笑)だいたい強い人ってどこか楽しそうな感じがしますね。わたし個人の意見ですが……次回シュレイナの秘密に迫っていきたいと思います!感想待ってます!!

そんな額は大したことない

シュレイナを先頭に歩いているとクロードがシュレイナに問いかけた。

「おいシュレイナ、これから何処に行くんだ？」

「んーそうね。とりあえず悟の魔服でも買いに行きましょう」

また新しい単語が出てきた。魔服？やっぱ魔法使いの服のことかな。

「悟、魔服ってのはな、闘いでは重要な役割を持つてんだ。いろんな魔服があつてな、防御を高めるものや、使用者の魔力を上げたりもする。中には属性によってその魔法を拒絶するものもあるんだ」

クロードが僕に説明してしてくれた。なんかこの辺はゲームでも一緒なんだあ。

「さあ着いたわよ！中に入りましょ」

見るとそこには周りの店より遥かに大きい魔服の店だった。

「シュレイナ、こんな大きな店で……僕お金なんて持ってないよ？」

そう言うときシュレイナは平気な顔で応えた。

「誰が、あんたに買えって言うのよ。お金なら問題無いわ」

そう言ってシュレイナは店に入ってしまった。僕もクロードと店に入る。

中には数え切れないほどの魔服があり、その種類は様々だった。シュレイナたちが着ているローブや甲冑タイプなどいっぱいあった。

「んーそうねー。なかなかいいのが無いわねー」

シュレイナが店内を見回して魔服を選んでいる。僕にはどれも同じように見えるのに……そんなに違うのかな。シュレイナがさらに奥へ行き見えなくなったところで声がした。

「そうね、これが良いかしら」

僕もそっちへ行くとそこにはガラスのようなケースの中に黒いローブが飾られていた。見た目は普通だけど大切に扱われているって事は……

「シュレイナ……これって」

「勿論あんたが着るのよ、すいませ〜ん！これ下さい！」

シュレイナが叫ぶと店の奥から人のよさそうなおばさんが出てきた。

「はいはい、お待ちせしました。ってあんた！この魔服のことを言ってるのかい！？」

店のおばさんは目を丸くして問いかけた。

「他にどれがあるのよ。これが欲しいの！」

「けど、あんたねえ」

おばさんが考え込む。この魔服……一体いくらするんだろう。僕は恐る恐る聞いてみた

「この魔服って……ちなみにいくら位するんですか？」

「……………200万シユエルよ」

「!!!!!!!!!!」

に、200万!? 『シユエル』 ってのはたぶんこの世界の通貨だと思っ
うけど200万って。

ポンッ

僕が呆けているとクロードが僕の肩に手を置いた。

「安心しろ悟。シユレイナにそんな額は大したことない」

クロードの言葉どおりシユレイナは信じられない言葉を発した。

「な〜んだ。意外と安いよね」

その言葉に僕だけでなく店のおばさんも驚いていた。そしてシュレイナは持っていた赤い布製の袋から一枚の用紙を取り出した。

「これで良いかな？おばさん」

そこに置かれた用紙を見ておばさんは目を見開いた。

「まあ！『ロベルト家』のお嬢様でしたか！これは失礼しました」

ロベルト？それって確か……

「シュレイナ、君は一体……」

「事情は後で説明するわ。さっ早くこの魔服出してよ」

「かしこまりました！」

そう言うとおばさんは店の奥へ行き鍵を持ってきてケースを開けた。

「さあどうぞ」

「悟、受け取りなさい。あんたの魔服よ」

僕は言うとおりにするとおばさんがわざわざ着せてくれた。

「あ、ありがとうございます」

思ったより軽い。しかも気のせいか力が溢れてきた。

「す、すごい」

「んじゃ。行きましようか」

そう言うときシュレイナはさっさと店を出て行ってしまった。

「俺らも行くぞ？」

僕とクロードも店を出てシュレイナの後を追った。騒がしかった店にはしばらく静けさが消えなかったらしい。

そんな額は大したことない（後書き）

みなさんもお気づきだとは思いますが、シュレイナはある人の孫です。

さあ次回は悟がいよいよ魔法を手にします。ご期待下さい！
感想待ってます！！

少しでも2人に近づきたい

少し歩いて僕らは町から離れた草原に着いた。

「よし、この辺でいいわね」

「シュレイナ……」

僕が早速質問しようとしたが。

「あゝちょっと待って。いろいろ聞きたいことはあると思うんだけど、まずは改めて自己紹介ね。あたしの名前は『シュレイナ・ロベルト』もう分かってると思うけど、グロツ様はあたしのおじいちゃんなの」

やっぱり、グロツ様と同じ苗字。だからお金もいっぱい持ってるんだ。

「ついでに、得意な魔法は『風』属性よ。あんたを連れて会場に行ったときの魔法も風の力なの。他の属性も大体できるんだけど、今は水の魔法を中心に使えるようにしてるわ」

シュレイナが説明を終えると今度はクロードが話し始めた。

「んで、俺の名前は『クロード・アーチェス』シュレイナとは、まあいとこみたいなもんだ。得意な魔法は『雷』だがあの風の魔法はシュレイナに教わったんだ」

一通り終わるとシュレイナが僕に向かった。

「それでさ、これからあたし達が悟に一つずつ魔法の力を分け与えるから。あんたは五属性のうち何の魔法がいい？」

僕は少し戸惑った、僕が魔法か……まったく実感がないや。でも慎重に選ばないと。

「一度決めたら、もう変えられないの？」

「え？そんな事はない……っていうか、消せないけど追加はできるわ。他の三属性も全部与えることはできるけど、悟の体もたないかもね。」

「体もたない？」

「そう、もともと魔力を持たない人間に無理やり魔力を与えるんだ。体に少しだけだが負荷がかかるって事なんだよ」

そうか、シュレイナやクロードみたいに天界の人たちは魔力がもともとあったから、平気なんだ。

「と、言うことでどうするの？ 悟、とりあえずあたし達が一個ずつ魔力を与えるから選びなさい、二つ以降はある程度の耐性ができてからよ」

「うん、わかった。じゃあシュレイナからは水を、クロードからは雷を教わりたい」

僕は2人の得意な魔法を選んだ。少しでも2人に近づきたい。そんな気持ちがいつの間にかあった。

「わかったわ。じゃあまずあたしからいくわね。クロード、離れてて！」

シュレイナがそう言うときクロードは10メートルくらいその場から離れてシュレイナは僕の前に立ち両手を僕に向かって突き出した。

「シュレイナ!？」

「いくわよ!……すう」

シュレイナは軽く息を吸うと全身に力を入れた。

「ハアアアアアアアア〜!」

シュレイナが叫ぶと彼女の周りに青い光が出てきてそれは徐々に小さく丸くなっていく、やがてシュレイナの手元には青く光る玉ができた。それを僕の体の中に押し込んだ。

「うっ!」

体の中に何かが入ってくる感じだ。少し気分が悪くなった。

「ふう〜これで悟は水の力を使えるようになったわ」

「え!?! たったこれだけで、僕にも魔法が?」

「まだ早いわよ! まずは自分の手から水が出るのをイメージしなさい」

僕は言われたとおりにしてみた。すると手から蛇口をひねったように水が出た。

「おお」

イメージをやめると自然と水は止まった。

「それが水の力よ。その力をよく理解し徐々に強く出したり弱く出したりして使いこなせてから魔法を教えるのよ」

「うん、わかった」

「おしっ、じゃあ次は俺だな。悟、いくぞ」

こうして、僕の中には水と雷の二つの属性が備わった。

少しでも2人に近づきたい（後書き）

悟がようやく魔法の力を手にしました。次回は悟がいろいろやってくれちゃいます。お楽しみに！感想待ってます！！

現にここに存在してるじゃない

「それじゃ早速、力の調節を試してみようか。悟、その辺に向かって右手に力を入れてみなさい。水が勢いよく出るから、そこから力を抜いたり入れたりするの」

「よし……………行け！」

僕は右手に力を込めてみた。すると……………

ドバアアアアアン！！！！

「水道管が破裂したように手の平からものすごい量の水が出てきた。

「うわあああ！」

「ちょ、ちょっと悟！何やってんのよ！？まず落ち着いて、早く力を抜きなさい！」

僕は驚きすぎて手を振り払った。しばらくするとシュレイナの落着けと言う声が聞こえて僕は静まり水も止まった。

「ハア、ハア……」

何だったんだろう今の。

「ちょっと悟、どうしてくれるのよ!? あんたのせいですぶ濡れじゃない」

シュレイナもクロードもすっかり濡れてしまった。

「それよりもシュレイナ、さっきの悟の水の量だが」

「ええ、悟が力を込めすぎても、あんなに出るはずが無い。それに悟は他の人間に比べて能力値が平均以下なのよ? それなのに」

シュレイナとクロードが考え込んでいる。僕には何がなんだか。そんな時シュレイナが閃いたようにクロードに問いかけた。

「あ、クロード、悟の『魔力』はちゃんと見たの?」

「ああ、そう言えば見てなかったな、けど魔力って三つの能力値に比例するんじゃないのか?」

あれ？人間って魔力を持たないんじゃない？……僕の気持ちを察してくれ
たのかシュレイナが応えてくれた。

「言い忘れてたけど、人間に魔力はまったく無いわけじゃないの。
その人の潜在能力みたいなものよ、普段は眠ってるけどその力をこ
の世界にすることで引き出してくれるのよ」

そうか、でも僕の魔力って一体。

「けど悟の魔力って………」

シュレイナが僕のほうを見て静止した。

「どうしたの？シュレイナ。僕の頭の上に何があるの？」

シュレイナが震えた声でかすかに口にした。

「そんな…ありえない。こんな人間が何で！？」

「どうした？悟の魔力はいくつだったんだ？」

クロードが尋ねるとシュレイナはまた震えた声で応えた。

「に、250」

その言葉に立っていたクロードがしりもちをついた。

「な、何の冗談だよそれ？ファリッサ最強でお前のじいさんのグロツ様だって200なんだぞ！？」

グロツ様が200？それで…僕が250。何かの間違えだよね？

「あ、あたしだって、こんな人間初めて見るわよ！天界人よりも魔力が高い人間なんて…あ、でも」

シュレイナが何かを考えこんで思い出そうとしている。

「わかったわ！悟の魔力が異常に高いのは、他の能力値が異常に低いからよ！何百年も前の話だけど過去にそんな話があったのを聞いたことがあるわ。己の魔力に他の能力値を吸われて異常に高い魔力を持った天界人がいたのを」

「それが、人間にもあるって言うのか？」

「現にここに存在してるじゃない、荒川 悟という人間が」

「じゃあ他の人間はどうなるんだよ？能力値が低い奴はみんな魔力が高いって言うのか？」

「多分、悟だけが特別なよ。これで分かったわ。そして確信したわ」

シュレイナがいつの間にか頼もしいほどに笑っていた。

「なんだよ？確信って」

「あたし達は確実に勝てる！！」

その言葉にクロードも喜びを隠し切れなかった。小さくガッツポーズをしていた。けどこの2人はまだ気付いていなかった、もちろん僕自身も。その魔力に魅了されてあることを忘れていた。

現にここに存在してるじゃない（後書き）

なんだか回を増すごとに悟のセリフが少なくなっているような気がします（汗）

悟は基本におとなしい設定ですからね。次はもっと増やそうと思います。

感想待ってます！！

ま、そうなるわな

「それじゃあ試しに、あたしが使える水の上級魔法を教えるわ」

「え、いきなり上級なんて無理だよ」

魔力がすごいのは分かったけど……まだ基本も分からないのに。

「何言ってるのよ！あんたの魔力はものすごいんだから、それを活かそうとは思わないの？」

「そうだけど〜」

「じゃあまずあたしがやって見せるから、一回で覚えてね。結構体力使うんだから」

「わかった」

シュレイナは軽く深呼吸すると呪文を唱えた。

「大いなる水の下部よ『汝』^{なんじ}その姿を神聖なる龍の姿に変えここに

降臨せよ！水龍メルガ・ポセイドン！」

そう叫ぶとシュレイナの手のひらからさっきの僕のように大量の水がした。けどその水は徐々に形を変えていき、水が収まるとシュレイナの横には3メートルほどの水の龍が現れた。

「呼んだかい？シュレイナ」

「じゃ、喋った！？」

「珍しくもないわよ。メルガ・ポセイドンってのはこの子の名前よ。あたしは『メルガ』って呼んでるけどね」

「敵はいないみたいだけど、どうして僕を呼んだんだい？」

「あたしの魔法をその悟に教えるためよ。もう戻っていいわよ」

メルガが僕のほうを見た。

「悟……人間か、ちょっとシュレイナ、悟と話があるからいいかな？」

「別に良いわよ？」

するとメルガがシュレイナを離れて僕のほうにやってきた。そして小さな声で

「おいコラ人間。シュレイナに手え出そうとしたら容赦しないからな」

「は、はい！」

すごく怖い……シュレイナとの対応が違いすぎる。

「どうしたのよメルガ」

シュレイナが声をかけてくれた。

「なんでもないよシュレイナ、今戻るから」

そう言ってシュレイナのところへ戻ろうとする瞬間に僕の方をシュレイナからは見えないように思いつき睨んできた。そしてシュレイナの手の中へ吸い込まれるように消えた。

「どうしたのよ悟。怖いものでも見たような顔して」

「べ、別に、なんとも無いよ！それよりシュレイナ。メルガっていつも暴れたりはしないの？」

「暴れる？あの子に限ってそれは無いわ。確かに闘うときは強いけど、あたしにはとっても従順よ。ペットみたいなモンよ」

「そ、そう」

（シュレイナは知らないんだ。ホントのメルガを……言わないでおこう）そう心に決めた。

「じゃあ悟、あんたもやってみなさい。あ、そうそう『降臨せよ』まででいいから。最初は召喚して契約を結びその名前を決めるの」

「わかった、……ふう」

僕もシュレイナに習って深呼吸をしてから呪文を唱えた。

「お、大いなる水の下部よ『汝』その姿を神聖なる龍の姿に変えここに降臨せよ！」

そう叫ぶと、僕の手のひらからまた大量の水が出てきた。そして徐々にその姿を龍の形に変えていこうとしたそのとき。

バアアアアン！！

その水が弾けとび八方に散った。

「え！？何ですよ？何で水龍がでないの？呪文はちゃんとあったのに」

「いや、ちゃんと水龍なら出てるぞ。そこに」

うろたえるシュレイナにクロードが僕の手を指差して言った。そこを見てみると

「ふゝ………ん？うわっでっか！何だよお前ら！？巨人に召喚されたのか？俺は」

手のひらサイズの小さい水龍がいた。

「・・・はい？」

僕とシュレイナの目が点になっているのがわかった。

「俺もついさっき、気付いたんだがなシュレイナ、悟には魔力はあるが他の能力値がかなり低い。つまりそれに応じた魔法じゃないとダメになるって事だ」

「って言うことは、いくら魔力が多くても強い魔法はできないって事？」

「ま、そうなるわな」

「「……………はあゝ」」

シュレイナと僕は同時にため息がでた。

「おい！一体どうなってるんだよ！？説明しろ！」

そんな小さい水龍だけが僕の手の上で叫んでいた。

ま、そうなるわな（後書き）

やっぱり悟君はダメみたいでしたね。水龍やそのほかの召喚魔法たちにはいろいろ個性を入れてみたいと思います。またいろんな召喚魔法がでてくると思うのでお楽しみに！感想待ってます！！

……おやすみね、悟

「つまりあれか？その人間がこの俺を召喚したはいいが、能力値が低すぎるから不完全な俺が出ちまったってことか」

僕の水龍がシュレイナの説明を聞いて納得したようだ。

「んなこと納得いくかあああ！！」

……そうでもなかった。

「お前らなあどうしてくれんだ！特にシュレイナさんよお。あんた相当な魔法の使い手なんだろ？何でこんなことになったんだよ」

シュレイナのことをこの水龍は知ってた。そんなに有名なのかな。シュレイナも自分の名前を呼ばれて驚いていた。

「なんであたしの名前知ってんのよ」

「召喚獣の特に水龍の中では有名だぜあんた。メルガがあんたのこ
とばっか自慢してるからな」

「あの子がねえ。ま、当然よね！」

シュレイナが勝ち誇ったような感じで言った。

「とにかくな、召喚されちまったモンはしょうがねえとして、早く俺に名前をつけてくれ」

名前かあシュレイナはメルガだけど、どうしよう……。

「お前の能力値じゃあそう長くは居られないからな。早く決めてくれ！」

「え、そんなのいきなり言われても」

「おい、もう行っちゃまうぞ！」

水龍の姿が徐々にただの水に戻ろうとしていた。

「ええっと、じゃあ……あ、アシュロン！」

僕はとっさに以前ゲームでつけたキャラの名前を言ってしまった。

「アシュロンか、悪くねえな。んじゃあな、悟」

そう言うアシュロンは僕の手の中へ消えてしまった。

「は〜とにかく、悟には初級呪文から教えるしかないわね」

シュレイナがまたため息をつきながら言った。

「いいんじゃないか？悟にはそれを補う魔力があるだろ、それで一回戦は楽勝だよ」

「それもそうね、じゃあ今から悟に水と雷の初級呪文をあたしとクロードで5つずつ教えるからあんたも早く使えるように努力しなさいよ!？」

「うん、わかった」

こうして日が暮れるまで僕は10個の魔法を必死になって使いこなせるように何度も練習した。こんなになるまで何かをするなんて初めてだなあ。すごく疲れた。

「大体こんなもんね、今日は帰って休みましょ。すぐ近くに支給された宿があるから、少し小さめだけどね」

そう言うとシュレイナは歩き始めた。

そんな中、悟たちがさつきまで居たところに黒い煙のようなものが現れ一人の少年の形になった。

『あの子が悟君ですか……なかなか面白い子だ。僕の計画にピツタりかもしれない、そしてもう一人もね……フフ』

そしてまた煙のように消えていったが悟たちは気付いてはいなかった。

く場面変わり悟たちの宿へく

「さあ付いたわよ！中に入って」

そこには木でできたログハウスのような宿があった。

「シュレイナ、この宿ってどうやってできてるの？」

「ああこれ？多分グロッツ様の部下達が魔法で造ったんじゃない？『地』の中級魔法に地面から植物の壁を出す魔法があるから」

魔法ってこんなものまで造れるんだ、ホントに何でもできるんだなあ。

ドアを開けると中もほとんど木でできており、机や椅子がありさらに奥の部屋へ行くとベッドまであった。そして窓際には……シュレイナの顔が描かれた絵？

「あゝおじいちゃんったらもう！ベッドはうれしいけどこういうものは置かないでよ！」

そういうとシュレイナはその絵をはがし丸めて捨ててしまった。

「相変わらずだなグロッツ様は」

「本っ当に毎年、ベッドがあるのはうれしいんだけど……絵はやめてって言うてるのに」

「愛されてるじゃねえかシュレイナ」

クロードが笑いながらシュレイナをからかっている。僕はベッドの上に座ると急に眠気が襲ってきた。

「ったくも、あれ？悟……もう寝ちゃったのね」

「このまま寝かしといてやろうぜ。悟なりに頑張ったんだから」

「……………そうね。明日はもっと過酷になると思うし。まあ悟なら自前の魔力でどうにでもなるでしょ」

「それもそうだな。んじゃ明日の作戦でもたてるとするか」

「あたしもそっち行くわ……おやすみね、悟」

そういうとシュレイナは悟の体にかぶせて部屋を出て行った。

……おやすみね、悟（後書き）

いろいろ詰め込みすぎましたね（汗）悟の召喚魔法に、新たな敵、グロツツ様の孫愛や（笑）シュレイナの優しい一面など。シュレイナは『ツンデレ』な設定にしてるんですが、どうでしょうか？ 次回
はまた悟君がやってくれちゃいます！
感想待ってます！！

絶対約束する！

次の日、一回戦『火の石争奪戦』が始まる1時間前。

「それじゃあ最後の確認よ。あたし達が教えた十個の魔法をそれぞれ出してみて。魔力は最小限でね、まずは水の第一魔法よ」

「わかった」

いくら初級魔法でも僕が使うと全ての魔法の規模が上がってしまう。だから今は最小限だ。

「水砲！^{クレウス}」

そう叫ぶと僕の右手を出てきた水が包み込み小さな大砲の形になった。そこからバスケットボールくらいの水の玉が発射され遠くにある木を破壊した。

ちなみにシュレイナや他の魔法使い達のクレウスは手全体ではなく指一本を包み、そこからビー玉くらいの水の玉を発射するらしいが僕は最小限の魔力でこれだった。一体全力を出すとどうなるんだろう。

「相変わらず悟のクレウスは別格ね。初めて使ったときは魔力半分であれだったけど、今は最小限なんでしょ？特訓の成果って奴ね！」

シュレイナが遠くにある粉々の木を眺めながら関心している。

「じゃあ次は雷の第一魔法だ。そうだなあ、あそこにある岩でいいだろう。狙ってみな」

僕は200メートルくらい先の小さな岩（遠くにあるから小さく見えるだけけど）に狙いを定めた。これくらいなら簡単に狙える。

「よし、スパレド雷矢！」

呪文を唱え2秒くらいすると遠くにある岩が砕け散った。スパレドは指先から雷の粒をだして相手に向かって打つ呪文だが今回も同じく他の魔法使いが使うスパレドはもっと遅い。クロードに見せてもらったが十分に目で追える速さだった。さらに岩が砕けるのではなくヒビが入る程度の威力しかない。

「スパレドは不意打ちに使う奴がほとんどだが、悟の速さなら直接相手に向けても使えるな。しかも悟のコントロールなら遠くの相手

でも外す事は無い」

今回はこのスパレドを主に使っていくらしい。人数が多い分一人一人相手にしていたらすぐに時間切れになってしまう。ここで僕のコントロールが一番に試される所だ。

「次！水の第二魔法」

「うん」

後の8つは後の闘いでネタバレ防止のため書くため省きます。

「OK。この十個の魔法があれば万が一でも一回戦で負けることは無いわね。でもくれぐれも力はセーブしなさいよ？あんただって自分の手で人の人生を終わらせたくはないでしょ？」

遠まわしには言ってるがこれは僕が誤って力を出しすぎたらその人を……考えたくも無い。絶対に力をセーブすることは忘れちゃダメだ。

「わかった。絶対約束する！」

「よしっ！一回戦まで後10分くらいだからスタート地点へ行きましょうか」

そして10分後、ついに一回戦が始まる花火が上がった。目の前には大きな壁がドームのようにありてっぺんからは木々が見えている。ここは大きな森らしい。そして僕らはちょうど人が通れるくらいの穴が開いたところにいた、ここが僕らのスタート地点らしい。

花火に見とれているとクロードが僕の耳に囁いた。

「悟…構えろ」

「え!？」

僕はその意味がよく理解できなかった。構えろって一体……暫くすると僕もようやくその意味が分かった。僕らはすでに敵に囲まれていた。

絶対約束する！（後書き）

悟が使うクレウスの形はぶっちゃけて言うところ○○○んの○気砲みたいな形です。そしてシュレイナたちのはそのピストル版です。

（笑）そこから水の玉が発射されるものだと思っていてください。悟君の活躍はまだまた続きます！

感想待ってます！！

早速潰さなくちゃいけないなんて

僕らを囲んでいたのは鈍器や刃物を持った人たちが数十人いた。何で僕らだけこんな目に……するとシュレイナが呆れたように言った。

「はー今年もやっぱり来たか、懲りない人たちね」

こんな状況でも何でそんな悠長なことを言っているんだ？

「シュレイナ、今年もって？」

「え？ ああ。 いや困ったもんよねーあたしが初めてこの闘いにエントリーしたのが5年前でその年も次の年も優勝したの。そして3年目から始まる時はいつもこう！」

3年前から？ でも何で僕達に妨害を。

「つまりな悟。他のエントリー者が金でこいつら雇って俺達の邪魔をするんだよ。俺は初めて参加するが、まさかこんなにも来るとはな」

クロードが説明をしてくれる。そうかこの人たちはみんな雇われて

僕達を。

「でも、だいたいいつも襲ってくるのは、悪い事して魔法の許可を一時停止された人たちだから、魔法は使ってこないの。だからいつもは適当に目くらましの魔法とか使って逃げてるんだけど……今回はその必要は無いわよ。ついでにもう二度とこんなことさせないようにしなさい」

シュレイナがニツツと笑った。あ、なるほど。だからシュレイナはあの時……

それは昨日の魔法を教わるときにシュレイナが僕に言ったことだ。

「雷の第二魔法だけど、多分スタートしてからいきなり使うと思うから、十分に力の調節を覚えておきなさい」

あの意味が今やっとわかった。

「悟、分かっているわね？ 雷の第二魔法。威力は10分の1で」

僕は左手を地面の下につけて呪文のを唱えた。

スファレイド
「雷の網！」

そう叫ぶと僕の手のひらからでた電流は地面を這って八方にちり周りの人たちを痺れさせた。スファレイドはそもそも雷を帯びた手で相手に触れて一時的に動きを止める魔法だが僕のはというと……

「悟のスファレイドは雷が手から溢れちゃうからねえ悟が抑えきれないから勝手に手を下に付いたら電流が八方に散ってくんだから、あたしも初めて使われたときは焦ったわよ。危うく感電するところだったわ」

そう偶然できた僕だけのスファレイドの使い方だった。そんな事を言っている間に周囲の人たちはみなちよっただけ感電して伸びていた。その中に一人だけ倒れたまま意識のある男がいた。その男の襟を掴んでシュレイナが言った。

「これで分かったでしょ？もう二度目は無いからね。わかった！？」

「……は…はい」ガクッ

そういうと男はそのまま気絶した。

「さくて気を取り直して出発しますかっ！」

そして僕は森の中へ入っていった。

（森の中歩くこと10分ほど）

遠くから闘っている音や何かが爆発する音などが聞こえた。いよいよ本格的に始まったんだ。そんな所に一人の男の声が聞こえた。

「よおアーチェス、久しいな。お前は今年からの参加だってな」

上を見上げると木の葉が茂って見えないけど誰かいる。アーチェス
っているのは、クロードの事か。

「あんたは……バイザンか」

「ああそうだ。そんで下にいる2人が俺のチームだ」

木の後ろから出てきたのは20代前後の背の高い女性と、僕と同じ
か一つ上くらいの男の子だった。そして木の上から飛び降りてきた
男は女性と同じ年くらいだった。

「はーあんまし期待はしてなかったがあの人数にこの速さで無傷とはな。まっ並みの魔法使いなら中級魔法くらい使えば簡単に倒せる人数だしな」

さっきの襲ってきた人たちはこの人が雇ったのか。すると女性のほうが愚痴を言い始めた。

「まったく使えないわね。だから魔法を使えるやつを雇って言ったのよ。あ、紹介が遅れたわね。私はシェリア。そして私達のパートナーの『瑞村^{みずむら} 耕輔^{こうすけ}』よ」

そう言い男の子の背中を軽く叩くとその子があわてたように挨拶をした。

「よ、よろしくお願いします！お、お手柔らかに」

そう言うと瑞村は震えながら手を差し出してきた。握手？やっぱり他の連れて来られた子共達も慣れない世界に緊張しているようだ。僕も手を差し出すと笑いながら

「よろしく！」と言った次の瞬間。

「悟！ダメ！！」

シュレイナの叫び声が聞こえた。そして瑞村もさっきまでとうって変わって…

「せっかく同じ世界の人と知り会えたのに……早速潰さなくちゃいけないなんて……悪いね」

気が付くと僕のローブの中に瑞村の手があった。

「え？」

そして彼が呪文を唱えた。

『フェルシ
突風！』

早速潰さなくちゃいけないなんて（後書き）

やっぱり悟は強いけど弱いところもありますね。でもそこが彼のいいところなんです！主人公には欠点があるほうが私はいいと思いますね。皆さんはどうでしょうか？完璧最強or欠点まるけ感想待ってます！！

悟が少しだけ怖く見えた

『目覚めよ…悟』

暗闇で声がする。誰だろう、僕に話しかけるのは。どこかで聞いたことのある声だ。何故か懐かしく感じる。

何処までも続いている暗闇。そこで僕は一人だった。また声が聞こえる。

『私の…目覚めさせよ』

声が途切れる。僕は暗闇に向かって声を投げかけた。

「あなたは、誰なんですか？」

『……いずれ……分かる日が来るよ。さあ今こそ力を解放しなさい！』

その言葉を最後に声は聞こえなくなった。

「待ってよ！あなたは……誰！？」

暗闇に向かって走ると急に足が沈みだした。

「……え？」

そして僕の体をどんどん飲み込んでいく。

「…嫌だ、助けて！誰か！」

そしてついに視界が真っ暗になり気が遠くなった。

～ここからシュレイナ視点～

悟が瑞村って子に吹き飛ばされて木に頭をぶつけて気を失った。悟
ったらいきなり油断して。全員が敵って言ったじゃない。

「いきなりなんて卑怯じゃない！」

と、言いつつもこの手の奴らは勝負に卑怯もクソも無いなんて言っ
て開き直るタイプの奴なのよねえ今更言ってもダメか。

「騙されるその子が悪いんじゃないのか？知り合いでもないのに近づいたらいくらなんでも攻撃するくらい分かるだろ」

確かにそれもそうよね。悟ってホントに馬鹿！

「さあ大人しく日の石、渡しなさいよ。ここからは私達も戦えるんだから、そっちが不利になるのよ」

今回の闘いのルールでは天界人は天界人同士。人間は人間同士でしか戦えないんだけど。どっちかの人間または天界人が気絶か戦闘不能になったらどちらかの加勢に行ってもいいルールになってる。

「だから何よ！あんた達なんてこのあたし一人でも十分すぎるわ！優勝常連者なめんじゃないわよ！」

実際あたしは負ける気がしない。多少はダメージを負うかもしれないけど、小さい頃から王家で魔法を教わったあたしならこんな相手に負けない、負けられないのよ！

「それじゃあ行くぜ？」

バイザンが臨戦態勢に入った。来る。

「あたしだってえ！」

相手に向かって走り出そうとしたそのとき。

「待つて、シュレイナ」

とたんに後ろを振り返る。悟？ 見ると悟が目を覚ましてこちらに歩いてきた。

「僕が、戦うよ」

「人間の方が戦えるならしゃーねえな。耕輔、行け」

バイザンがひとまず引いて代わりに瑞村が出てくる。

「何だ、また倒されたいのかい？」

瑞村は余裕の表情だった。悟、本当に戦えるの？

「悟、あんたもう大丈夫なの？」

「大丈夫だよシュレイナ。ゴメンね。すぐ終わるから」

「すぐってあんた……！」

悟があたしの横を通り過ぎるときに悟の表情を確認した。さっきまでの悟じゃない。確かに悟だけど……何かが違う。すごく冷たい目をしてる。どうしたのよ悟。

「ちょっと悟！」

あたしが飛び出そうとしたときにクロードに肩を掴まれた。

「今は…行かないほうがいい」

「どうしたのよクロード」

「まあ見てろって」

クロードが不適に微笑んだ。こんなクロードも初めて見る。そんな事をしてる間に悟が瑞村の近くまで来た。

「さっきはゴメンね、君があまりにも弱くってつい」

口では謝ってるけど全然そんなきが伝わってこない。それに対して悟は

「いいよ、僕も油断しすぎたみたいだし、ここからはちゃんとするから」

何よ悟、あんたそんな事いう奴じゃないでしょ？あたしには悟が少しだけ怖く見えた。

悟が少しだけ怖く見えた（後書き）

悟君が何かに目覚めちゃいましたね。書いてみてシュレイナがここ
まで動揺するのはちよつと違和感を感じます。次回は悟が悟じやな
くなります。

感想まっています！！

いっちょ行きますかっ！

「じゃあまた君をぶっ飛ばしてやるよ『フェルシ』！」

瑞村がまた悟にフェルシをぶつけようとするとう悟はいとも簡単にその風を避けた。あの動き、確実に今までの悟るじゃない。

「そのフェルシって魔法は相手に直接当てないと意味がないみたいだね」

「そ、それがどうしたんだ！まだ僕には他の魔法だって…」

瑞村が悟の反応にうろたえていると悟は更に瑞村をあおった。

「じゃあやってみなよその魔法を、僕は何も邪魔しないからさ」

「は？何言ってるんだよお前。調子に乗んなよ！『フェルカルス風牢』！」

呪文を唱えた瑞村の手から現れた。ダメだ！あれは避けないと。そう言っているうちに悟の周りを風が回転しながら包み込んだ。

「この魔法は捕われたら最後だ。出ようとするや鋭い風が触れた部分から切り裂いていくぞ。そうしなくてもこの風はそのうちお前を傷つけるけどな」

見ると悟を囲んでいる風の球体が徐々に小さくなっていく。マズイ、早く何とかしないと。……え？ 悟何してんのよ？

悟はゆっくりと左手を上げて風に触れようとした。ダメよ。いくらあんだでもそれは！

「大丈夫だよシュレイナ。それに魔力も弱めるし……『スパレド』」

「何？……うわ！」

悟が呪文を唱えた瞬間に瑞村の肩が撃ちぬかれた。嘘！？全然見えなかった。それ本当に魔力を弱めてるの？

撃ちぬかれた肩を必死で抑えてもがいている瑞村。集中力が切れたおかげで悟の周りの風が消えた。

「じゃあ今度はこっちから行くよ。…『クルセルド水鞭』」

それってたしか水の第二魔法。使用者の手を水が覆い長い鞭のように形状を変化させる魔法、やっぱり初級だから普通の人間界にあるような鞭になるけど悟のは……

「な、なんだよこの魔法。やめろ！はなせ！」

体全身を巻きつけるほどに大きくて長い。一度捕まってしまうばあとはこっちのもの。そのまま高いところに上げて落とせば普通の人間なら気を失う。

「いくよ。……それ！」

しかし悟はその腕をそのまま振り下ろし瑞村を地面へ叩き付けた。そんな悟がそんな事をするなんて。しかも一度や二度じゃなく…何度度も。

「や……やめてくれ。僕の負けでいいから」

瑞村はかなりのダメージを負いほとんど喋れない状態だった。そんな状態を見てか悟はつまらなそうに

「そろそろかな？」

瑞村を地面へと降ろし彼のそばまで行った。

「僕の負けだけど。けどバイザンとシエリアがやってくれる」

「まだ口が開けるんだね。じゃあトドメだ。」

「い、いやだ」

「さっき君は僕に中途半端な攻撃をしたから、今こうなってるんじゃないか、だから僕は君のようにはしない。雷の第四魔法……『スフォイル・』」

「ちょっと待ちなさいよ悟！ホントにその子死んじゃうじゃない！」

それだけは嫌だって言ってた悟がなんの躊躇もなくここまでするなんて。絶対悟じゃない。

「邪魔しないでよシュレイナ。あと少しなんだから。さあいくよ」

ここであたしが止めないと。悟は……もう。あたしはとっさに走り出し悟を捕まえてこっちを向かせた。

「やめなさいって……言ってるでしょ！」

（ここから悟の視点）

気が付くと目の前には涙目のシュレイナが僕の肩を掴んでいた……痛っ。右の頬がじんじんする。

「こんなの、悟じゃない。どうしたのよ……グスッ」

「泣いてるの？シュレイナ」

シュレイナが泣くなんて。まだこの人とは会って少ししか経ってないけど、シュレイナが泣くなんて想像がつかなかった。

「なんで泣いてるの？」

「……悟？あなた、悟よね？」

おかしい質問をする。何でこんなことに。

「僕は悟だよ」

「何よ、最初にあったばかりの悟じゃない。ビックリさせないでよ！さっきまでのあんた、ホントに怖かった」

涙をぬぐいながらシュレイナがこたえる。さっきまで？それっていつの話だ？

「ったくいつまで泣いてんだ？シュレイナ」

そこへクロードがやってきた。

「敵はあと二人いるんだ。しっかり腰入れろって！」

そう言ってシュレイナの背中を軽く叩いた。それに反応するようにシュレイナが顔を上げた。

「そ、そうね、さっあんたはもういいから、そこにいなさい！」

シュレイナからもう涙は出てなかった。クロードともに立ち上がり敵に向かい直した。

「それじゃあ、いっちょ行きますかっ！」

いっちょ行きますかっ！（後書き）

悟君が暴走してシュレイナがそれを止める。この構図は最初に決めてあったのですが結構序盤で出してしまいました。（汗）でもなんだかい感じに出来たと思います。次回はシュレイナとクロードの活躍です！

感想待ってます！！

これが本当の魔法使いの戦いなんだ

シュレイナとクロードが僕の前に出て戦闘体勢にはいる。

「な、なんだよあの悟って人間は！あんな力があつたなんて」

「安心しなさい、悟はもう戦わないから。ここからはあたしたちが相手をしてやるわ！」

うろたえるバイザンにいつもの強気なシュレイナが前に出た。

「何よ！さっきはちょっと驚いたけど……それでもそれはその子の力。あなたたちだけなら怖くもないわ！」

シェリアが反抗するがその言葉には力がなかった。

「そんじゃあ、さっそいくぞシュレイナ」

「オーケー！」

「いくぞ！」

クロードの合図に四人が一気にその場から消えた。

「え？どこ行っただのシュレイナ！」

「すきあり！」

後ろから声がした。振り向くとバイザンが僕の後ろで右手を振り上げて魔法を放とうとしていた。

「ちょ、ちょっと待って!!！」

「お前はこっちだよ！」

すると少し離れたところからクロードが右手から火の玉を出してバイザンにぶつけようとした。が間一髪でバイザンは避けてそしてまた二人とも消えた。

「悟！あんた突っ立ってたら巻き添え食らうわよ。こっちきなさい」

シュレイナに腕を掴まれて茂みに放り込まれた。

「あんたはここにいなさい」

「ずいぶんと余裕ね、シュレイナ」

すると木の上からシェリアがシュレイナに向かって水の矢のようなものを何発も打ち込んできた。

「つく！……おりゃ！」

シュレイナの掛け声とともに右手から風のシールドが現れそれをはじいた。二人とも呪文を唱えてないのに魔法をつかった？これが本当の魔法使いの戦いなんだ。

しばらく見とれていると徐々に四人の姿が見えるようになってきた。いや正確にはバイザンとシェリアのスピードが落ちてきていたんだ。

そしてバイザンとシェリアが背中合わせになり姿を現した。

「つくそ！このままじゃやばい！」

「ここは逃げた方が……」

そういつているうちにシュレイナが空中に現れて

「スキあり！『水錠』！」
クレイル

両手から出した水を細く伸ばし二人に投げつけた。

「しまった！」

すると水は二人に巻きついて拘束した。

「あとは頼んだわよ、クロード」

「ああ、『炎輪』！」
ライク

クロードの手から炎の車輪が現れ徐々に大きくなっていく。

「避ける！シュレイナ！」

「わかってるわよ！悟、こっち」

シュレイナに引っぱられ更にその場から離れる。

「いっけー！！」

クロードの投げた炎の車輪は二人に直撃し小さな爆発が起こった。爆炎が消えるとそこには倒れている二人がいる。まさか……シュレイナが二人に近づくとバイザンが顔を上げた。よかった死んでない。

「さあ、火の石を出しなさい」

シュレイナが手を差し出す。

「……ちくしょう。……ほらよ持ってけ！」

バイザンが箱を投げ渡す。シュレイナがそれを受け取ると。

「よしっ！勝利！！」

そこへクロードが降りてくる。

「さあぼさつとしてねえで次ぎ行こうぜ！」

「何、あんたが仕切ってんのよ！あたしがリーダーでしょ？」

「リーダーとかいつ決めたんだよ？」

「たった今よ！」

「……ま、いっか。行こうぜ悟」

「う、うん！」

やっぱり凄いや、二人とも。

これが本当の魔法使いの戦いなんだ（後書き）

ちゃんとした戦いを書くのは初めてだったのですがどうでしたか？
どうしても自分のイメージしている戦いと読者の方のイメージが違
ってくると思うのですが、想像が難しい方はド○ゴン○ールのレベ
ルの高い肉弾戦に魔法が加わったものだと思ってください。衝撃波
だけ見えるようなあれです……長くなってしまうましたが次回は悟
君の修行に入ります。感想待ってます！！

一回戦を突破できる……よね

しばらく森を歩くと突然目の前の地面から巨大なモグラが出てきた。

「ギャオアアアア！」

どうやらこいつも僕を襲ってくるようだ。

「はぁーもう五体目だよシュレイナ」

僕もそろそろ疲れてきた。いくらすぐに倒せるからと言ってもう何度も出てこられたら嫌になる。

「何弱音吐いてんのよ！さっそとやっちゃいなさいよ」

「わかったよ。水の第三魔法『水の剣』クリルザン！」

この魔法は字の通り右手から水の剣を出す魔法だ。ここでも僕の魔法は常軌を逸脱していて、普通なら小刀程度の剣が僕のは身の丈ほどの剣になる。

「やゝと！」

二、三度切りつけると巨大モグラはその場に倒れた。

「ふう」

「ずいぶん慣れてきたわね、初めて会った時と比べたら大きな進歩よ。それも全部あんたの魔力のおかげね」

確かにこの世界になってから僕は少しずつだけ変わっている事が自分でもわかった。すぐに弱気にならずにまずはやってみたり、体力も付いた。

「んじゃ先を急ぐわよ！」

「えゝまだ行くの？ちょっと休もうよ」

「何言ってるのよ！一体誰のせいでこの巨大獣の巣で修行してると思ってるの？」

「そりゃゝまあ」

時は少し前にさかのぼる。僕らがバイザンたちを倒して先へ進む時だ。僕は自分に何があったかを全く覚えてなくて、シュレイナやクロードに聞いた。

「いったい僕に何があったの？ 気が付いたら瑞村君って子は倒れてるし、シュレイナは泣いてるし。説明してよ」

「それは、あんたがっ……」

シュレイナが言葉につまり黙り込む。

「クロード、僕に何があったの？」

「別に大した事じゃねえよ。お前が相手に吹っ飛ばされて強く頭を打ったから気を失ってただけだ。その間に俺たちで瑞村を倒して、悟を起こそうとしたがなかなか起きないからな、シュレイナが死んだんじゃないかって勘違いしたんだ。…なっ？」

クロードがシュレイナに振る。シュレイナは俯いてた顔を上げて。

「そ、そうなのよ！ ホントにビックリしたわよ。だから思いっきり頬を叩いたら悟が起きて安心したわ」

何かおかしい。二人とも何かを隠してるみたいだ。それに僕は覚え
ている、シュレイナのあの言葉を。

『さっきまでのあんた、ホントに怖かったっ』

あれは一体……………。

「とにかく次に敵とであった時しっかり戦えるように行くわよ！」

「え？行くってどこへ？」

シュレイナがニヤリと笑った。

「巨大獣の巣へ」

そしてそこでは様々な巨大獣が現れ、一番多かったのがさっき倒し
たモグラだった。そして現在に至る。

「じゃあ次は防御魔法ね。あたしが今からこの石ころを風の魔法に
乗せて飛ばすわ。それを防いでね」

シュレイナが手ごろな石を拾うと

「準備はいい？」

「いつでもいいよシュレイナ」

「行くわようシュレイナ様の剛速球を受けてみよ！ 『突風』^{フエルシ}」

シュレイナが野球選手の投球のモーションをとってから呪文を唱える。こういうサポートのような魔法の使い方もあるんだあ。あの石が当たったら痛いじゃ済まないんだろうな。僕はそんなことを考えながら左手を前に出し呪文を唱えた。

『雷の盾！』^{スフェイル}

僕の目の前に黄色い円状のシールドが現れて飛んできた石を粉々にして跡形もなく消え去った。スフェイルは守ると言うよりは弾くと言ったほうがいいかもしれない。この雷のシールドは高速に回転しているため、触れたものを削っているんだ。ふつうならあの大きさの石なら弾いて違うところへ飛んでいくのをやっぱ僕のは回転数が多すぎて粉々になるらしい。

「うん。上出来ね！この調子で水も雷の魔法も完璧にするわよ！」

それから何体くらい倒しただろう。もうどんな敵が現れても大丈夫のはずだ。このまま行けば一回戦は突破できるだろう。洞窟を抜けてからまたしばらく歩くとクロードが叫びだした。

「あああ！！！」

「ど、どうしたのよいきなり大きな声出して」

「シュレイナ、時間があと三十分しかないぞ！」

「……………ええ！？」

このまま行けば一回戦を突破できる……………よね。

一回戦を突破できる……よね（後書き）

やっぱりそう簡単にはいきませんね。あとあと考えるとシュレイナは投球のフォームやらをどこで見たんでしょよね？ いろんな疑問などがあがるかもしれませんが長い目で見てあげてください。感想待ってます！！

この人を助けたい！

「何で言ってくれなかったのさ！一回戦のルールに制限時間内にたどり着かないと強制失格になるって」

僕たちはひたすらに走っていた。ゴールをめざして。

「だって毎年あたしは一番にゴールしてたから時間なんて気にしてなかったのよ！それにあんたの修行も必要だったし。あたしのせいじゃないわよっ！」

「おいお前ら、ケンカしてないでもっと速く走ってくれよ。このままだと間にあわねえぞ」

「わかってるよ！」

「わかってるわよ！」

二人の声が同時にクロードに向けられた。

修行のおかげで二つ目の火の石は簡単に手に入りそれでも制限時間は残り十分を切っていた。僕は二人のすぐ後ろを走っていたが、だんだん疲れてきた。そんなときにシュレイナが。

「んゝ悟もそろそろ限界に近いわね。クロード、悟をおぶって。あれをするわよ」

シュレイナが僕を気遣って何かするようだ。

「そうだな、この距離なら残ってる魔力でなんとかなりそうだ。悟、乗れ」

「うん」

僕はクロードの背中に乗ると二人が立ち止まりその場でしゃがみこんだ。

「え、どうしたの？」

「悟、魔力ってのはただ魔法を使うために消費するもんじゃないのよ。」

すると二人は陸上競技のクラウチングスタートのポーズをとり。

「魔力を……足へ」

次の瞬間二人は地面を蹴り加速した。

「うわっ！」

「振り落とされんなよ、悟」

高速道路で車の窓から顔を出したときに受ける風。まさしく僕は今そんな風を受けている。

「何でこんなに加速が……うわっ」

クロードがもう一度地面を蹴り更に加速した。

「それはな、俺たちは自分の魔力を体の一部に集中させてその部分を強化するんだ。ちよつとコツがいるがな」

「喋ってないでもっと加速するわよ！」

そう言うとシュレイナはもう一度地面を蹴りまた速くなった。

「もうそろそろだな」

「ねえクロード、一つ聞いていい？」

「ん？どうしたんだ」

「わざわざ走らなくてもあの時使った風の魔法で行けばもっと楽なんじゃないの？」

あの時と言うのはシュレイナたちが風を纏って会場にいった時の魔法だ。

「あゝあれな。あの魔法は上級魔法だからな、それ相応の魔力が必要なんだ。シュレイナはいけるかもしれないが、今の俺の魔力じゃ足りないんだ。俺もまだまだだな」

あの魔法も上級だったんだ。確かに水の上級魔法も長い呪文を言っただけ。

「そっかあ。あ、あれがゴール地点かな」

そこには高い塔のような円柱の屋根がとんがった建物が見えた。

「おうそうだな。もう時間ギリギリだ」

クロードが時計で確認する。門の前ではシュレイナが立っていて僕らも門の前に到着する。

「やっと着いたわね、じゃあみんなで門を開けるわよ。せいのっ」

『あの、ちょっと待ってください!』

門を開けようとした瞬間にどこからともなく声がする

「え、何、敵？」

僕らが振り向くとそこには金髪でショートヘアの青い目の女の子が立っていた。外国の人だろうか、それとも天界の人？

「何よあんた？」

シュレイナが前に出た。

「あ、あの別にあなたたちと戦うつもりはありません、時間が時間ですし……」

確かにあと十分ほどで僕らは強制失格になる時間だ。ここで戦ったたとえ片方が勝利したとしても時間切れになってしまう。じゃあ一体……

「も、もし火の石が3つ以上あるなら……一つ譲っていただけませんか？」

「「「???」」」

「自分が無理を言ってるのはわかってます！でも私たちにはもうこの方法しかなくて……でももう何人にも断られて」

その子はとても必死だった。でも何でこの子一人なんだろう。自分のパートナーは、とそこへこの子のパートナーらしき人が現れた。

「もういいのよ『アリシア』。今までも無理だったんだから今回は運が悪かったのよ、ごめんなさいねあなたち、私たちはもうここで失格だから先に行ってちょうだい」

その人はもう完全に諦めていた感じだった。運が悪かった？ 一体何があったんだろう。助けたいなあこの人たちを……あ、そういえば。

「悪いけど、あたしたちは3つしかもってないわ。せっかく会えたけどここでお別れね」

「待つてシュレイナ！ 確かあったよね、もう一つ火の石が」

「え！？ 本当ですか？」

「はい、今手元には無いですが、けどある場所は知っています。僕が今から……」

しかしそこへシュレイナの言葉が遮った。

「ダメよ悟っあんた自分が何言ってるかわかってるの？」

わかっている、その火の石を取りに行けば僕は確実に失格になる事だって。でも僕は……この人を助けたい！

この人を助けたい！（後書き）

ここで新キャラ登場です。そしてここでもまた悟君の優しさが悪い方向へ向かおうとしています。でもそういうキャラ……私は嫌いじゃないです。次回は悟とシュレインが活躍します！クロードはちょっとお休みです（笑）

感想待ってます！！

絶対に戻って来いよ

僕たちが最後の火の石を手に入れたとき、その相手はすでに二つ持っていてすなわち僕らの火の石は合計で四つになったんだけど、しばらく走ってから敵のいないところでシュレイナが。

「四つあっても仕方ないわね。その辺に捨てておきましょう」

と言って言葉どおりその辺の茂みに捨ててしまったのだ。あの火の石を取りに行けばこの人を助けられる。

「わかってるの？ 悟、あの場所から短時間で戻ってこられたのはあたしたち天界人の力があつたからなのよ！ 今から行っても時間内に戻ってこられる保障は無いわ！」

「わかってる、でもやってみなきゃわからないよ！ 絶対に戻ってくるから！」

そう言い残して僕は森の中へ戻った。

「つとにもう絶対にわかってないわ。あたしも行くから、クロードはここで待ってて、間に合わなかったらあんた一人で先に行ってて」

「ああわかった」

そしてシュレイナも悟のあとを追った。そこへアリシアがクロードに話しかけた。

「本当にいいんでしょうか？ 悟さん……でしたっけ、私のために」

「行っちゃまったモンはしゃあねえよ悟はああいう奴なんだ、それよりあんた、これ持って先に行きな」

と言ってクロードはアリシアに火の石を投げ渡す。彼女はそれをあわてて受け取った。

「わわって、え？ これって」

「もし悟が間に合わなかったのためだ。行ってくれ、悟が間に合わなかったらあいつはきつと後悔するだろうからな」

アリシアは火の石をじつと見てから。

「あ、ありがとうございます！ 私、向こうで待ってますから！」

「ああそうしてくれ」

そしてアリシアとそのパートナーは扉の向こうへ行ってしまった。

「悟が間に合わなかったらシュレイナ怒るだろうないや、いや必ず怒るな。だから絶対に戻って来いよ、悟」

「悟たちの視点へ」

シュレイナとともに火の石を捨てた場所にたどり着いた僕は火の石を探していた。そんな僕をみてシュレイナは。

「ねえこの辺だよねシュレイナ」

「そうだけど……ホントにバカよねっ悟って」

「うっ」

自分でもわかってたけど。ここまでストレートに言われるとグサッと来るものがあった、けど。

「嫌なんだ、目の前に困っている人が居るのに助けられない自分が無力な自分が。でもこの世界に来てから少しずつだけど自信がもてたんだ。シュレイナやクロードのおかげだよ。だから今は人の役にいたいんだ！」

自分の世界にいる時の僕は困っている人が居ても何も出来なかった。いや、やろうとしなかったんだ。どうせ僕がやっても……という思いがありその一歩が踏み出せなかった。だから今は少しでも……

「はあわかったわよ。あたしも探すからあんたも全力で探しなさいよ！」

「ありがとう！シュレイナ」

そして探すこと五分くらいで火の石が見つかった。

「あつたよシュレイナ！早く、クロードたちの所へ戻ろうよ！まだ間に合うよね？」

「……無理よ」

「え？無理って、魔力を足に使う力があれば、間に合うはずじゃ」

「その魔力が無いのよ。それにあったとしても残りの時間が無いわ」

そ、そんな、ここまで来たのに。また僕は助けられないのか。この世界でも僕は…無力だ。

「だから、あんたの魔力を使うわ」

え、僕の魔力？

「右手を出しなさい」

「う、うん」

僕は言われたとおりにする。

「ちょっとした間だけだからね、それと……許してよね、おじいちゃん」

（おじいちゃん？それって）

そう言うときシュレイナは僕の手を握り呪文を唱えた。

「……………我はペトラルカの血を次ぐ者。今は亡き汝の力を我に授けたまえ。ウラヌス・メイリス・ペトラルカ」

その呪文を聞いた瞬間に僕は意識が遠のき気を失っていた。

「ロベルト家に代々伝わる魔力吸収の魔法よ本当は禁術なんだけど、ごめんね、悟の魔力は一日もあれば回復するだろうから少しの間だけ借りるわね。これであの魔法が使える。制御できるかは怪しいけど…やってみますか！」

シュレイナは呪文を唱えるとその場から消えた。

絶対に戻って来いよ（後書き）

活躍って程でも無かったですね（汗）本当は火の石を見つけてからバトル展開にしようと思ってたのですが、よく考えたら十分でいてバトツて戻るのは無理ですねということで、シュレイナの伏線を張ることにしました。この魔法はのちのち登場したりしなかったり（笑）感想待ってます！！

あれ？何かおかしい

「まだなのかよ、あいつら」

残り時間が三分を切っておりさすがのクロードも焦り始めていた。
そんなとき、

「……っと、どいて〜！！！！」

目の前の森からシュレイナが飛び出してきた。しかも猛スピードで

「うわああああ！っち、しゃあねえな。地の魔法はあまり得意じゃないんだが……」

クロードは地面に手を付き呪文を唱えた。

ドルニス フェイム
『土壁・柔！』

するとクロードの目の前に地面から土が盛り上がり身の丈ほどの壁ができた。その壁は文字通り柔らかくなっておりシュレイナを怪我無く受け止める。

「ふうく助かったわ、クロード」

「助かったじゃねえよシュレイナ！、いきなり突っ込んで来やがって」

よく見るとシュレイナの背中に白い翼が見えたがすぐに消えてしまった。

「シュレイナ、まさかお前」

「そのまさかよ、やっとあの魔法を使うことができたの。全く制御できなかったけどね」

「それより、魔力はどうしたんだよ、今のお前じゃまだまだ足りないだろ？」

「悟の魔力をちょっと借りたの、ロベルト家秘伝の禁術でね」

（禁術って話には聞いていたが……無茶しやがって）

「とにかく行きましょ、ほらっ悟も起きなさい！」

シュレイナに担がれたまま悟が目を覚ました。

「ん、うゝん……シュレイナ、ここって」

「着いたわよ、ゴール地点に」

「え！？ホントに？本当に着いたんだ！あれ？アリシアさんは？」

「俺が持ってた日の石を渡して先に行ってもらったよ。万が一ってこともあるしな」

「はあ！？あんたね、あたしたちが間に合わなかったら先に行きなさいって言ったでしょ！何で渡してんのよっ？」

「まあ間に合ったんだからいいじゃねえか。悟もあの子を助けたかったんだろ？」

「うん、ありがとうクロード」

「まったく、みんなバカばかり！さあ悟も降りなさい。今度こそ、

みんなで扉を開くのよ」

「うん」

そして悟たちは目の前の扉を開き中へ入っていった。そして悟たちがいなくなった場所にまたあの黒い煙が現れ少年の姿になった。

『彼らはいったい何をしているんだろう。あんなの助けなければすぐに自分たちがゴールできたの言うのに……まだまだ天界人や人間にはわからないことばかりだ。それよりも悟君、君は僕の予想を遥かに超えてくれた人間だよ。早く彼と話がしてみたいな』

そう言ってまた煙のように消えてしまった。

く悟の視点へく

扉を開けると、そこは闘技場のような広場だった。そこには三人一組でのチームが……僕らを合わせて4チーム居た……あれ？何かおかしい。シュレイナもそれに気づいたようで僕に話しかけた。

「気づいた？参加したのは120チーム普通に行けば40チームが残るはずなんだけど……以上に少ないわね」

「きっと誰かが三つ集めた後に妨害でもしたんだろ？よくある事だ」

「それはあたしも考えたんだけど、それをしたとしても少なすぎるのよ、皆がみな妨害したとは考えにくいし」

「な〜んか今回は怪しいな、この中に必要以上に敵を倒していったやつがいるってことだ」

この中にそんな人が……一体。

あれ？何かおかしい（後書き）

ちよっといつもより短くなってしまったような気がしますね。他にアイディアが浮かばなかったです（汗）次回は少しでも時間を戻して久しぶりに登場のグロツツ様のからです。
感想まっけます！！

足音は聞えなかった

時は悟たちがゴールする少し前の事。自分の孫が一番に到着すると
言っていたグロッツ様は……

「おかしい、シュレイナは一体何をやっているのじゃ、このくらい
の試練ならあの娘なら簡単に乗り越えられるはずじゃろうに……」

（まさかこの中にいる誰かにやられてしもうたのか）

そこへ甲冑を身に着けたグロッツの部下が現れた。

「報告します！シュレイナ様が到着されました」

「おお、そうか。それにしてもギリギリじゃなあ。よしそれじゃあ
時間じゃ皆の前に顔を出すかの」

くそして時は悟たちへ戻るく

「悟さん！よかったく間に合って、本当に心配してたんです！」

到着して周りを見渡すとアリシアさんがこちらに気づいてやってきた。

「うん、シュレイナのおかげだよ！おかげで間に合った」

「ホントよ全く！後先考えず突っ走って、こっちの身にもなりなさいよ！」

シュレイナはまだ怒っていたようだ、そこへアリシアさんのパートナーもこちらへやってきた。

「私からもお礼を言うわ。ありがとう……ってあなた、シュレイナって『シュレイナ・ロベルト』？」

パートナーの女性が驚いたようにシュレイナの顔を見て質問する。

「うん、あたしがシュレイナだけど……」

「うわー！本物だ！あの魔法学院を首席で卒業して毎年このウィザード・ストウラゴで優勝してる、シュレイナ・ロベルトさん！」

さっきまでのおとなしい感じとはえらく変わってずいぶん興奮した

様子だった。

「ちょっと、恥ずかしいからそんな大きな声で言わないでよ、あなた今年から参加してるの？」

「は、はい！あ、私、『カネア・ナスラム』と言います。去年学院を卒業して一年間訓練を積んでから今回が初めてで、でも全然だったんです……シュレイナさんに助けてくれなければ今頃……」

カネアさんがシュンとしていると、シュレイナがあることに気づいた。

「そういえばカネア、チームは3人1組のはずだけど……もう一人は？」

その言葉を聞いてからカネアさんの顔が更に暗くなる。

「もう一人は、途中で別々になって……まだ戻ってきてないんです。幸い火の石を三つ持っている人が一人でも到着すれば合格だったのでよかったのですが」

「何があったの？」

「それが……」

カネアさんが言いかけたとき、目の前に雷の玉がいきなり現れてそこからグロツツ様が現れた。

「えー一回戦突破の諸君まずはおめでとう、少々数は少ないがまあいいじやろう。ここにおらん者は後で人間界へ返すのじやよ。ここにいた時の記憶も消してな」

負けたら記憶を消されるのか、シュレイナやクロードの記憶、それはちよつと嫌だなあ。

「さて二回戦はチーム戦を行う。5人1組でチームをで戦うのじや。それではここにクジを用意した。誰からでも構わん、引いてくれ」

こうして僕たちを入れた4チームが出来上がり、それぞれにまとまった。そこにはアリシアさんもいた

「戦いは2週間後とする。その間に親睦を深めたりお互いに技を磨くのもいいじやろう。しかし他のチームとは戦うでないぞ、チーム内での訓練は許可する、それではこれにて解散じや。火の石はそれぞれ持ち帰って構わんぞ、わしのサービスじや」

僕らは出口から外へ出てその場を後にした。その頃別のチームでは……

「こんなもの持っていてもしようがないですね、その辺に捨てておきましょう」

そう言うのと小柄な少年はローブの中から大量の火の石を地面に捨てた。それに気づいたもう一人の男が

「君、その石！」

「ああこれですか？2回戦が40人もいるのは面倒ですからね、今のうちに倒させていただきました」

その言葉に驚きを隠せない三人と平然の佇む女性。

「あら、私はわかっていたわよ、誰かが意図的に人数を減らしたのも、それを誰がやったのかも」

「ほおそれはそれは、さすが僕の次にここへ到着した人間ですね、今回は楽しめそうだ」

「それはそうと、あなた、パートナーは？私が来たときもいませんでしたけど」

「ああそれなら少し離れた町で待機させてあります」

少年はあっちの方ですと指差しながら言う。

「え？それじゃあ君は一人でここまで！？」

「まあその話はいいいじゃないですか、先を急ぎましょう」

そう言うと少年は会場から離れていくが不思議なことに足音は聞えなかった。

足音は聞えなかった（後書き）

ここからはチーム戦になるので登場人物が一気に増えていきます。皆を均等に喋らそうと思ってるのですが、多分放置になる人も出てくると思います。特にクロードとか（笑）感想待ってます！！

一人になんてなりたくない！

僕はチームで泊まる宿に来ていた。

「本当によかった！まさかシュレイナと同じチームになれるなんてね、もしかしてグロツ様がしてくれたのかしら？　こうやってみんなで話すのもいづぶりかしらね」

どうやらカネアさん以外の三人は魔法学院での仲良しグループだったらしい。会場が出るなり学園時代の話をずっとしていた、そして今も。

「シュレイナったら一人で飛び級して先に卒業しちゃうんだから、それに去年も私達は初参加だったのに少しも手加減しないもんね？」

やっぱりシュレイナは負けず嫌いだったんだ。

「それは、あたしが戦いの厳しさってのを教えてあげたのよ！」

「それにしても、毎年優勝してる人がね」

「」「だよね？」

三人がそれぞれにグチを言っていた。それを見て男性陣のいつの間にか打ち解けあった。そしてその中にただ一人いすに座って俯いているカネアさんがいた。それに気づいたシュレイナは。

「あなたもよろしくね、カネア」

それに気づいたカネアさんはすぐに立ち上がってシュレイナの前に向き直った。

「こ、こちらこそっよろしくお願いします!」

と言って深くお辞儀をした。シュレイナは別にいいからいいから、と言って笑っていたが次第に真剣な顔になり。

「それより、あなたのもう一人のパートナーの話の途中だったわね。みんな聞いて!もう気づいてると思うけどここにいるアリシアちゃんのもう一人のパートナーがいらない事なんだけど、最初から……話してくれる?」

そしてカネアさんは重い口を開いた。

「はい、わかりました。あれは私達が最後の火の石を手に入れたすぐにあった出来事です」

（カネアの視点）

「やった！これで三つそろったわ！」

「ああ、後はゴールするだけだな！まだ時間もあるしここからは歩いて行くか。どうだ？アリシアそろそろ疲れてきたか？」

彼の名前は『カルマ・グレッタ』彼とは幼馴染で魔法がとても上手くて今回も彼のおかげでほとんどの戦いに勝利したようなものなんです。

「はい、歩きの方が私は助かります」

「相変わらずお前の敬語は抜けねえな。確かに歳は上だが別にタメ口でもいいんだけどなあ」

「そのうち慣れてくるわよ、さあ行きましょっ」

そんなときに、来たんです。あの闇が。

「おい、向こうの方おかしくねえか？何か黒いモヤみたいなのが、それに周りの木が……」

「え？」

それは一瞬この世の終わりかと思いました。その黒いモヤを中心に周りの植物が見る見るうちに枯れていくんです。

「おい！やばいぞこれ、走れ！！」

私達はすぐにその場を離れようと思いました。でも次第に黒いモヤが広がるスピードが速くなったんです、そこでカルマは……

「俺が様子を見てくるから先に行け！それとこれも持って」

「え？カルマさん！」

投げ渡されたのは火の石でした。カルマが三つとも持ってたんですけど全部渡して。

「わかったわ、ここはカルマに任せて行くわよアリシア」

それからアリシアと私は逃げ続けたんですがしばらくするとまた黒いモヤが追ってきたんです。そこにカルマの姿はありませんでした。

「何！？カルマは？……つく、アリシアこの火の石二つはあなたに渡すから一人で逃げなさい」

「え？……嫌です！一人になんてなりたくない！」

「あたしは必ずカルマと戻ってくるから、ゴール地点は教えたとおりに覚えてるでしょ？」

それでもアリシアはそこから動かずに。

「カネアさんまでいなくならないで！私は一人じゃ……」

「いいから！行きなさい！！」

私が声を上げて言うとアリシアは頷いて一人で逃げました。私は振り返り黒いモヤが近づいてきて……

『あなたは持っていますね？ 渡して下さい。さっきの人は抵抗されたからちょっと遊んじゃいましたけど…もう面倒なので…フフッ』

その声が聞えてからは何も覚えていません。気が付くと私は倒れていて、手の中にあった火の石はなくなっていました。私はすぐにアリシアの後を追うとゴール地点の近くの茂みに隠れていたアリシアを見つけました。

「カネアさん！」

「ごめんねアリシア、石…盗られちゃった」

「そうですか…でもカネアさんが戻ってきてくれて、私……」

アリシアが泣き出しそうになったので私が落ち着かせてると。

「カネアさん、私に考えがあるんですけど」

「どうしたの？ もう私達は失格よ、今さら何をしたって」

「ここに来る人たちに、私頼んでみます！ 火の石が余分にあるなら

どうにかして……」

「そんなの無理よ。いいのよまた来年もあるし」

もともと初参加の私が一回戦を突破することが出来たのもカルマの……

「私は嫌なんです！人間界に戻りたくない！」

そうよね、この子……

「気持ちわかるけど……」

「私、行ってきます！」

そう言ってアリシアはその場を離れてゴールする人たちに声をかけていったんです。

「あの子が自分から……」

でもやっぱりダメで、次々に断られました。そんなところへシユレ

イナさんたちが来てくれたんです。

一人になんてなりたくない！（後書き）

セリフばかりの回になってしまいましたね、それにいろいろ詰め込みすぎたような気がします・・・次回は他の人間界から来た仲間達を紹介します。

感想待ってます！！

あたし……あの子苦手かも

「これが私達に起こったことです。カルマは今もどこにいるかはわかりません。シュレイナさんたちが来てくれなかったら……今頃」

ここでカネアさんの話が途切れた。そして今度はシュレイナが口を開いた。

「そんな事があったの……今日の夜にでも私がおじいちゃんに聞いてみるわ。だから今は顔をあげなさい」

シュレイナがカネアさんの背中をさするとカネアさんは少し元氣になった。

「はい、ありがとうございます」

「じゃあ氣を取り直して、みんなの自己紹介をしましょうか。悟、あんたから見本になりなさい」

「え、僕？何を言えば……」

「とりあえず名前と、歳ぐらい言っときなさい」

「わかった…名前は荒川 悟、12歳です」

「じゃあ、質問ある人っ」

シュレイナが皆に呼びかけるが少しの間、沈黙があった。けっこうこういうのって聞きづらいのもあるんだよね。そんな中一人の女性が手を挙げた。

「じゃあウチいいですか？」

その人は長身で長めの茶髪で陽気そうな関西弁だ、大阪の人かな。

「いいわよ」

「えっと、悟君やったっけ？自分は魔法の属性は何使うん？」

「あ、えっと水と雷です」

「ほゝ二つ使うんやあ。おおきに、次いってええよ」

その人がにんまりと笑って僕の方を見た。なんだろう。

「次からは自分の属性も言いましょうか、じゃあ次あなた」

と、言ってシュレイナはさっきの関西弁の女性を指名した。

「ん、ウチの名前は『崎野 葵』^{さきの あおい} 14歳、属性は火だけやけど結構魔法には自信あるさかい。よろしくやろな！あ、苗字やなくて名前と呼んでや！」

けっこうテンションの高い人だ。テーブルを囲うように座っていて葵さんは僕の左隣に座っていたので自動的に時計周りに自己紹介が始まった。次は柔道部の主将のようなゴツい体の男性だった。短い黒色の髪の毛をかきながら口を開いた。

「次は俺か。名前は『神室 大介』^{かむろ だいすけ} 俺も歳は14だ。属性は風と地。以上だ」

淡々と自己紹介を終え、次の人に回った。アリシアさんだ。

「私の名前は『クリス・アリシア』です。13歳で属性は水と風です。よ、よろしくお願いします」

と言って律儀に頭を下げる。そこに葵さんが質問をした。

「なあなあ！自分どこの国から来たん？金髪やし目え青いし、ごっつかわいらしい顔しとるな！」

ずばずば言われてアリシアさんもじもじしていて、焦っていた。

「えっと、出身はフランスです。5歳の頃に日本に来てずっと日本暮らしです」

「さやか、ええなあ。羨ましいわフランス」

葵さんが目を瞑りながら想像している自分がフランスにいる想像で
もしているんだろうか？そんな姿を見てシュレイナが、

「えっと次行ってもいい？」

「あ、どうぞ、どうぞ」

申し訳なさそうにぺこぺこする葵さん。

次はグレーの少し長めの髪の毛で背丈は僕と同じくらいだけどどこか大人びていた。

「俺で最後か、名前は織田^{おだ} 陸斗^{りくと} 12歳。属性は火と雷だ」

僕と同年だ。それなのに何故か年上に見える。誰かに似ているなあ。

「みんな終わったわね。じゃあ次はみんなに二回戦で使う武器を選んでもらいましょうか」

その言葉に葵さんと大介さんがピクツツと反応した。

「武器！？ホンマにええの？よっしゃあ！ウチな、学校で剣道部やってん、しかも部長な！ほんでテレビで日本刀振り回してんの見ていつかウチも日本刀使って見たいなあって思ってたん！」

シュレイナがマシンガンのような言葉の銃弾に圧倒されながらも指を差しながらあっちに武器庫があると言うと葵さんは一目散に走っていった。

「あ、俺も！」

それにつられて大介さんもちょっと早足で向かった。葵さんほどじやなくてもこの人もウズウズしてたんだ。

「私達も行きましょうか」

アリシアさんに言われて僕と織田君も武器庫に向かった。

すれ違いざまにシュレイナがボソっとつぶやいた。

「あたし……あの子苦手かも」

「……………」

織田君とアリシアさんはなんの事だかわかっていなかったが僕にはわかった。シュレイナが押されるなんて……恐るべし関西人のしゃべり。

あたし……あの子苦手かも（後書き）

とりあえずメンバー4人の紹介でした。それぞれのパートナーはカネア以外はこの後はほとんど出ないつもりです……見た目的には皆さんのイメージにお任せしますただ女性キャラは葵は灼○のシ○ナを関西人にしたような感じでアリシアはISのシャ○のショートバ―ジョンだと思ってください。

感想待ってます!!

やっぱり誰かに似てると思ったら

僕らが部屋に入った時には初めて入った二人は武器を選んでいる最中だった。

「おうホンマにあったわ日本刀！カッコエエワ……どりゃ！」

そう言って葵さんは刀を剣道の竹刀のように振っていた、意外と軽々と振ってる。本物の刀って結構重たいって聞いてたけど……僕はためしに樽に挿してある刀を一本取ってみた。

「っお、重い」

やっぱり重たいや、なのに葵さんは……と彼女を見ていると視線に気づいたのかこっちに来た。

「なんや？自分も刀にするんか？あかんあかん。もう持ち方からして初心者丸出しやんか。使い方間違うたら自分が怪我するで」

「……そうですうよね。うゝん僕に合う武器って」

「ウチもなあ刀ってのはええんやけど……こんなめっちゃあったら

選べへんわゝ自分もちょっと探してくれへん？」

「あ、はい」

僕は言われるがままに樽の中の刀を何本か取り出してみた。ううやっぱり重いや。そこへシュレイナがやってきた。

「どお？ 自分に合う武器は見つかった？ 悟、何してんの？」

「えっと、僕は……」

僕がシュレイナに話そうとする前に葵さんに先をこされた。

「あ、シュレイナさん！ ウチ、どの刀にすればええか迷うてるんですっ何かシュレイナさんのお勧めってありますやろか？」

「そ、そうね……」

やっぱりシュレイナはたじろいていた。それでも自分の考えを主張した。

「天界にあるほとんどの武器は自分の魔力を武器に溜めて使うものなの。あなたの属性は確か火だったわね、だったら」

シュレイナは樽の中にある刀を探りやがて一本の

「これなんていいんじゃない？ 『炎刀灼刃』えんどうしゃくば この刀は使用者の魔力の入れ方次第では金属さえも焼き切ることのできる刀よ」

それを受け取った葵さんの目は輝いていた。その刀とシュレイナを交互に見て。

「おおき…いや、ありがとうございます！ シュレイナさんに選んでいただけるなんてっウチこの刀に決めました！」

ずいずいシュレイナに近寄ってお礼を言っていた。それに対して相変わらず微妙な顔のシュレイナは。

「そ、そう。よかったわね」

苦笑いを浮かべながら少しずつ離れていった。葵さんが刀を抜き刀身を眺めながらうっとりしている頃大介さんはと言うと。

「なあ、シュ、シュレイナさん……」

言いづらそうにシュレイナに自分の選んだ武器を持って来た。

「俺の属性は風と地なんスけど、この武器は合ってますか？」

と、差し出してきたのは黒い金属製の棒と鉄球を鎖でつないだハンマーのようなものだった。

「えっとこれかぁ。ねえクロード！あんたの知り合いでこれ使ってる人居なかったっけ？」

近くで談笑していたクロードがこちらに気づいてやってきた。

「ああこれか。大介だっけ？これはまさにお前にぴったりの武器かもしれないな」

その言葉を聞いて大介さんは驚きの表情だった。

「え！？そうなんですか？一体どんな武器なんすか？」

クロードはニヤッと笑い

「それは後で外で使ってからのお楽しみだ。とにかくお前にはその武器がいいだろう、体格にもあってるしな」

大介さんの背中をポンと叩いて着いてきなと宿の外に出て行った。

「はい！」

大介さんもその後を追っていった。みんな自分にあってる武器を見つけている。んゝ僕に合う武器ってなんだろう。

「え？私はこれですか？」

「そうよ、アリシアにはこれがいいわ」

「でも……」

見るとアリシアさんがカネアさんと弓矢を選んでいた。それも西洋風で色も赤色の派手な装飾が着いたものでおとなしそうなアリシアさんにはちよつと違和感があった。

「アリシアには遠距離の方が向いてるわよ。それがいいと思うわ」

「カネアさんが言うなら」

と、しぶしぶ承諾したようだ。残りは僕と織田君だけか。

「俺は……これかなあ」

織田君が手にしたのは両手にはめられるタイプの短剣だった。残りは僕だけかあ。そこへ織田君が来た

「悟はどうするんだ？」

「あ、織田君……」

「織田君だなんて、同い年なんだから陸斗でいいよ」

「うん。り、陸斗、自分に合った武器がなかなか見つからなくて」

「それなら、今は簡単に選んでそれから使いこなせるようになれば」

いいじゃんか」

「そういうのでいいのかなあ」

「とりあえず合う合わないは別にして、自分がいいなと思う武器を使ってみればいいと俺は思うぞ。俺も力はある方じゃないけど足には自信があるんだ！だから小さい武器にしてみたんだ。悟もそういう選り方にすればいいんじゃないか？」

「へー凄いなあ陸斗は」

陸斗の説明に僕は正直に感心した。あ、やっぱり誰かに似てると思ったら『龍一』だ。

「おい悟。あれなんだろう？」

陸斗が指を差している方を見るとそこには。

「これって……腕輪？」

真っ黒な腕輪があった。

やっぱり誰かに似てると思ったら（後書き）

主人公なのに悟のセリフがやたら少ないことに気づき始めました。
悟自身の性格もあるんでしょうが：やっぱり私の力不足です（泣）
さて悟君が出会った腕輪。一体どんなものなのでしょうか？感想待
ってます！！

あの力だけは解放してはならぬ

「これって武器なのかなあ？」

僕は柵の上に置いてあった腕輪を手にとってみた。

「さあ、付けてみるか？」

「うん」

左腕に通してみた。少し大き目かな……すると手首のところで腕輪が僕の手首の大きさに合わせて小さくなった。

「うわっ！何だこれ？」

そこへアリシアさんがやってきた。

「悟さん。武器は見つかりましたか？」

その後ろからカネアさんが僕の腕輪を見るなり血相を変えた。

「ちょっとそれ！見せなさい！……やっぱり」

何がやっぱりなんだろう。付けてはいけないものだったのかな。

「シュレイナさん！ちょっとこっち来て下さい！」

「どうしたのよカネア。そんな大きな声出して……悟？その腕輪。今すぐ外しなさい！！」

シュレイナが今までに見たことのないような驚いた顔でこちらに詰め寄ってきた。

「どうしたのシュレイナ……あれ？外れない」

腕輪を外そうとしたけどがちりと腕に付いて離れなかった。

「まさか！」

そこへアリシアさんがカネアさんへ問いかけた。

「カネアさん、あの腕輪って何なんですか？」

「その腕輪の名は『黒天の腕輪』……この世界を創ったこの世界の神『オルセス様』が持つ『神器』と呼ばれる7つの道具の一つよ。中でもその腕輪はオルセス様がこの世界を創った時に邪悪なものを一切取り払い封じ込めたものがその腕輪だと聞いてるわ」

「そんなものが何でこんな所に？ シュレイナ……」

シュレイナが思い出したように言い出した。

「本当なら神器はすべてあたしのおじいちゃんが管理してるはずなんだけど、確かこの前」

それはこの戦いが始まる半月ほど前の事。

「おい、シュレイナ！」

「ん？ どうしたの、おじいちゃん。そんなにあわてて」

グロッツは息を切らせながらシュレイナに問いかけた

「黒天の腕輪を知らんか？」

「黒天のってたしか神器の一つでしょ？あたしが知るわけ無いじゃない」

「そうか、どうしたもののじゃ。あの腕輪はわしでも使うことが困難なのじゃ。他の6つとは違う、異形の神器じゃ。どんな魔導師であろうとあの腕輪をはめたら腕輪に心を支配されてしまう。わしでさえ意識を保つのがやっとだと言うのに、他のものの手に渡ってしまつてわ一貫の終わりじゃ！」

「そんな危険なものを何でちゃんと管理してないのよ！」

「いや、神器の管理は抜かりない。いつでも交代で城の者に見張らせて居るのに。何故か朝には無くなっておったのじゃ！あの腕輪だけは、あの力だけは解放してはならぬ！」

「……って言ってたんだけど、こんな所にあつたなんて」

シュレイナが訝しげに腕輪を見た。

「シュレイナ、僕どうすれば」

急にこの腕輪が恐ろしくなってきた。一刻も早く外さないと。

「あんた、体に異変とかは無い？」

今の所はなんともない。

「うん、大丈夫だよ」

「おじいちゃんが言うにはつけた瞬間に中に封じてある邪神に支配されるって聞いてたんだけど」

陸斗が僕の顔を覗き込んでくる。

「本当になんとも無いのか？悟」

「うん、本当になんともないよ。でもとても気分がいいとは言えないかな」

本当に邪悪な物がこの腕輪に入っているのなら、何も感じはしないけど少し不安だ。

「なんとも無いなら今のところは安心ね。それよりもそれが武器なら使って見るのもいいんじゃない?」

とんでもないことを言い出したシュレイナ。この腕輪を武器として!?!でもどうやって

「それなら、俺が使い方を知っている」

大介さんと宿の外に出ていてしばらく見なかったクロードが戻ってきた。

「ホントに!?!知ってるの?」

「ああ」

そしてクロードがニヤッと笑った。

あの手だけは解放してはならぬ（後書き）

とりあえず悟君にいわくつきの武器を持たせました。次回は腕輪の力が明らかになります。感想待ってます！！

この二人おもしろいなあ

クロードが説明をはじめた。

「その腕輪は身に付けた奴の思ったとおりのものになるんだ。例えば『剣になれば』と思えば剣になるし『盾になれば』と思ったら盾になるって分けた。さらにその力は付けた者の魔力に比例して力が増す」

へへさすが神器ってだけあって凄いや

「あんたよくそんな事知ってたわね」

「ガキの頃に読んだ神器にまつわる古い蔵書に書いてあったんだ。オルセス様以外にもその腕輪を使えたものが大昔にいたらしい」

「へへじゃあ早速外で試して見ましようか」

そして僕らは外へ出て一面草原の所へ行きそれぞれの武器を使ってみた。

「じゃあ悟、何か思ってみて。武器なら何でもいいわ」

「わかった」

僕は深呼吸して、まずは剣を想像してみた。すると腕輪が黒く光左腕を光が包み込み徐々に形を変えていき剣の形になった。よく見ると腕輪から剣が生えているものでその剣もやっぱり真っ黒だった。それに何故か重さは感じられなかった。

「すげー」

陸斗が思わず口にする。僕自身も声にならないほどその剣に見とれていた。僕はとりあえず縦に振って見たすると剣からオーラのようなものが出て鋭い刃の形となり一直線に進んでいき遠くの方で消えた。

「何よ……これ」

その刃が通った後には地面が深くえぐられていた。そこに障害物があつたら跡形もなかっただろう。

「す、すごい。めっちゃすごいやん、自分！これやったら誰が相手でも圧勝やな。期待してんでえ」

葵さんのテンションが急激に上がっていた。背中をバシバシ叩かれて少し痛い。

「悟だっかけ？最初は小さくて弱そうな奴だと思ってたけど、見直したぞ！」

大介さんも力のある声で言ってくれた。

「悟、二回戦は頑張ろうな！」

みんながいろんな言葉で励ましてくれる中アリシアさんだけが浮かない顔をしていた。

「どうしたの？アリシアちゃん」

シュレイナがアリシアさんに声をかけた。

「はい、私にはその……その腕輪が恐ろしく見えます」

確かに、全ての邪悪なものをこの腕輪に封じたって言うし、あまり安心はできないかな。

「大丈夫よアリシアちゃん、心配しなくても悟は腕輪に支配なんかされないわ」

事情を知らない葵さんと大介さんにはクロードが一連の話をしていた。

「そういう事だったのか。でもそれをコントロールできる悟の魔力って」

「せやな、グロッツ様かて使えへん腕輪やのに、悟君の魔力ってどれほどなん？」

「250だ」

クロードがさらっと答えると二人はそのままかたまってしまった。やっぱり他の人はもっと低いんだ。

「えーっと……大介え自分、魔力って見てもろたか？」

葵さんが大介さんにかたまったままの表情で聞くと。

「ああ確かこの世界に入ってから見てもらったが、90だった。人間にしては結構高いって言われて浮かれてたが……ガクッ」

その場で手と膝を地面につけて挫折していた。ズーンと言う効果音が聞えたような気がした。

「そうか、ウチも一緒や85って言われて同じく人間界では高い方やって言われたんやけども……なあ」

そして葵さんも同じ形になった。この二人おもしろいなあ。そこへシュレイナが。

「大丈夫よ二人とも。確かに人間界での人間の魔力の上限は100よ、でも天界では上限がないの。だから訓練次第ではいくらでも上げられるのよ、だから顔上げなさい」

「ホンマにか！？シュレイナさん！よっしゃ、そうと決まれば早速修行や！行くで〜！」

と言ってパートナーを連れて全速力で遠くの方に行ってしまった。

「相変わらずね、あの子も……よしっそれなら皆も分かれてしまし

ようか。自分の魔法と武器を組み合わせての修行ね。ある程度距離をとってやった方がいいわ。一旦解散！」

シュレイナの号令でそれぞれがパートナーと一緒に分かれて修行することになった。そして僕はと言うとシュレイナ、クロードと共にこの腕輪と魔法をどう組み合わせるかを考えていた。

「とにかく、おじいちゃんには悟の腕輪の事は黙っておいた方が良さそうね、ばれるといろいろと面倒だし」

「それもそうだな、でも腕輪の力使ったら一発でばれるだろ？」

「ばれたらやっぱり、まずいのかなあ？僕は正直に言ったほうが言いたいと思うんだけど」

「ダメよ、それでもし今回の戦いが中止になったら台無しじゃない」

それはそうだけど。何でシュレイナはこんなにも……毎年優勝してるからやっぱりプライドがあるのかな。僕は他にも考えたけど答えが見つからなかったので諦めた。

「じゃあ、あたしの考えを聞いて頂戴！」

シュレイナが一つの提案をした。

この二人おもしろいなあ（後書き）

やっぱり悟君はすごいですね、それに挫折する葵と大介の姿を想像したり個性的なキャラ、特に葵の全力マイペースなところが書いておもしろいです。関西弁が間違ってたらすいません。感想待ってます！！

また今度も役に立てなかった。僕は……

「ようするにその黒いオーラがばれたらダメなんですよ？ だったら自分の魔法で隠せばいいのよ」

「隠すって言うと、例えばどうやって？」

「例えば悟が腕輪を剣に変えた瞬間にクリルザンも出して隠せばいいじゃない、すこし大きな目を出せば十分隠せると思うわ」

「そうか、それならいけないかも。しかしその意見にクロードが渋った。」

「確かにそれで隠れると思うが、悟の負担が大きすぎないか？」

「うーん、僕も全力で出したのは初めて使ったときだけだったからどれだけの負担があるかはわからないな、でも……」

「僕、やってみるよ」

「これ以上シュレイナたちの足手まといになりたくない。そんな思いが強かった。」

「そうか？じゃあやってみろ」

僕はまた腕輪を剣にしてそれを振ったと同時にいつもよりも大きな目のクリルザンをだした。

「クリルザン！」

クリルザンで剣を覆い刃を放つと……

「え？」

刃は青黒くなりさつきよりも更に深く地面をえぐっていった。とたんに僕は目眩をおき倒れそうになった。

「つと、大丈夫か？悟」

クロードが僕の体を支えてくれた。

「ありがとうクロード、もう大丈夫だよ」

それでも疲れたかな、息が少し切れているのがわかった。そこへシユレイナが。

「ごめん、悟。ちょっと無茶だったかな」

「だな、少し休んだら俺の考えたのを聞いてくれ」

少し休憩してからクロードが話し始めた。

「そもそもそんな馬鹿でかい剣なんかにしなくたってクレウスみたいに小さくすれば見えないだろ？」

そうか、いくらようするに目視できないほどに小さくすればばれない。

「例えば形を普通の天界人サイズのクレウスにしたりとかな」

「それもそうね、じゃあそれで行きましょうか、クロード念のために『土壁^{ドルにス}』出しといてよ、強度は最上級ね」

それってクロードがゴールの手前でシユレイナと僕を受け止めたっ

て言ってた魔法か、一つの魔法にも種類があるんだ。

「魔法にはね魔力次第で力の大きさは変わるけど、それとは別に性質も変えることができるのよ。それはまた今度ね」

「だから地の魔法はって言っても仕方ないか、魔力が結構消費しちまうなっおっしいくぞ! 『土壁・剛!』^{ドルニス ゲオラル}」

呪文を唱えるとクロードの足元から地面が盛り上がってきて巨大な壁ができた、厚さも結構あるなあ。

「これに向かって放ちなさい」

「わかった」

僕は腕輪をクレウスの形に想像すると…手、全体が黒く包まれて小さな筒が人差し指にできた。僕はそのまま弾の発射をイメージすると。

「悟……あんだ、何やったの?」

「…………え?」

目の前にはシュレイナの顔そしてあるはずの壁が無かった。

「これ……僕が？」

「悟が倒れたと思ったらいきなり壁が崩れ始めたのよ」

「これはタダの攻撃じゃないな、むしろ消滅に近い」

「消滅？」

「悟、お前その形にしてから弾を発射したのか？」

「うん、イメージだけ」

「イメージだけでこれか、もし実践で使ったら」

とんでもないことになる。ばれるばれないの問題じゃない。消滅なんて……

「そうね、その腕輪はもう使わないほうがいいかもね。おじいちゃんには素直に言った方がよさそう」

「二回戦は魔法だけってこと？」

「そうなるな、でも安心しろ。それだけでもお前は十分に戦えるよ」

クロードが励ましてくれたけど……僕はすっかりしなかった。また今度も役に立てなかった。僕は……

また今度も役に立てなかった。僕は……（後書き）

悟君はなかなか活躍できませんね、主人公なのに……早く悟君がここよくに戦うところを書きたいです！もうちよつとの辛抱ですね。感想まってます！！

あなたは……誰ですか？

そして日も暮れ僕らは宿に戻った。宿では修行を終えた皆が楽しく談笑をしていた。きっと皆は自分の武器と魔法の組み合わせの成功したんだろうなあ、それなのに僕は……

そこへ陸斗が僕に気づき近づいてきた。

「どうした？ 悟、そんな暗い顔して」

自分ではそんな顔をしたつもりは無かったけど……やっぱりわかるのかな。

「大丈夫だよ陸斗、何とも…無いから」

「そうか？ それならいいけど」

そのときシュレイナが皆へむかって話し始めた。

「みんな！ お疲れ様。今日はゆっくり休んでね、明日もほぼ一日修行だから今のうちに寝ておきなさいって言ってもみんなクタクタか。男子はあっち女子はこっちの部屋ね」

「「はい!!」」

シュレイナの指示にみんなが応える。と、そこへ葵さんが手を上げた。

「シュレイナさん、ウチらお風呂とかはまだやねんけど……」

そういえば、この世界に来てからあまり意識してなかったけどそういうばお風呂ってこの世界にもあるのかなあ。

「んーやっぱり人間界の子たちは入りたいわよねえ。あたしも最近入ってないし、造りましょうか」

え、造る？それって……

シュレイナは外へ出て、だいたいこの辺かと呟きながら長方形に線を引いた

「マレーサは地の魔法でここに土台、コミルは水、ネルザは火を着けて。あたしは薪を調達してくるわ、クロードも付いてきて」

「はいよ」

シュレイナが次々に指示を出していったみんながそれを始めた。

『ドルニス・造形！』
フアリタグラム

一人がそう唱えるとシュレイナが線を引いた地面から土が盛り上がってきいてあつという間にフタの無い箱になりそれはまさしくお風呂の形だった。しかもかなり大きな目の。

そこへもう一人が手から水を出し、そこへシュレイナが木を切って作った薪をお風呂の下に置きそこへ火を着けて……お風呂が完成した。

「すぐ温かくなるからねうちよつとまって！どうしたのみんな、せっかく造ったのに入らないの？」

それをみて僕らはポカンとしていた。こんなに簡単にお風呂って造れるんだ、やっぱり魔法って凄いや

「あ、じゃあウチ入る！って言いたいんやけども……服を……」

葵さんが話してるうちに声が小さくなっていく。

「それもそうね、ほらっ男子は一旦宿に戻る！」

そう言われ僕は小走りに宿へともどった。そっか、葵さんも普通の女の子だもんね。

それから一時間ほどして女性陣たちが宿へと戻ってきた。

「あゝすっかりしたわゝ、ホンマにおおきになシュレイナさん」

頭から湯気を出しながら葵さんが気持ち良さそうな顔をしていた。

「男子も入りたい人は入っていいわよ。火を着ければいつでも温かいから」

「んゝそうだな、俺達もはいるか」

クロードが伸びをしながらそう言って部屋を出ようとした。それに続き僕らも外へ出てお風呂に入った。

そして全員が宿へと戻ったとき女性陣は談笑をしていた。パートナ―たちは魔法学院を卒業してからの事、葵さんとアリシアさんは自分達の世界の事などの話をしていた。

「さて、明日も早いし寝ましようか。明日は属性に分かれてするかみんなそのつもりだね」

「「はい！」」

「それと、クロード」

「ん、なんだ？」

「明日はあたしは城に行ってるから、あんたがまとめといてね」

「なんだ、城に用があるのか？」

「うん、ちょっとね」

そういい残しシュレイナは女子部屋に行き女性陣たちも後に続いた。僕らも自分達の部屋へ行き就寝した。僕は明日の修行についていけ

るのかな、不安だった。

「明日も頑張ろうな！」

「お前には期待してるぞ」

陸斗と大介さんが寝る前にそんな事を言ってくれて少し自信がもてた。

「うん、頑張るよ」

その日の夜、僕は不思議な夢を見た。あたり一面が闇一色に染まり僕一人だけだった。そして向こうから唸り声が聞えてくる。人じゃない、獣？その瞬間、闇の中から二つの黄色く光る丸いものが浮かび上がった。これって……目？黄色い目に黒い瞳のそれはこっちを見ながら何かを言っている。

「――――ぞう、――――まごと――――しを――――める」

うまく聞きとれない。これって一体なんなんだ？何故僕の前に。

「あなたは……誰ですか？」

「グオオオオオ！」

獣がいきなり叫びだし、僕は目を覚ました。窓の外を見るとまだ夜だった。あれは一体……

あなたは……誰ですか？（後書き）

自分で言うのもあれですがホントに魔法ってのは何でもアリですね
（笑） ついにお風呂まで造ってしまいました。そして葵は何だかんだで女の子なんですね、さて次回は悟君の修行第二弾！ここでも悟君は何かやってくれます！
感想待ってます！！

よろしくね！

「――とる、――ろ、――だぞ〜悟！」

目が覚めた、あれからまた寝ちゃったんだ……もうあれは出てこなかったけど……目の前には陸斗の顔があった。

「悟、みんなは起きてるぞ、朝メシできてるから早く来い」

陸斗が僕の肩を掴んで前後に揺さぶった。うう寝起きだから気持ち悪い……

「朝ごはん？この世界の朝食って」

天界の朝ごはんってどんなだろう、木の実とかなあ。

「まあ来て見ろよ」

そう言って陸斗は部屋を出て向こうへ行ってしまった。僕もベッドから起き上がり部屋を出た。

昨日みんなで談笑していた部屋にはもうみんなが起きていて朝食の用意をしていた。

「あ、悟さん。おはようございます」

アリシアさんが皿を並べている手を止めて僕に気づいて挨拶をした。僕も素直に返した。

「おはよう、アリシアさん」

そこへ葵さんが来て。

「おゝ悟君、遅いでゝウチ待ちくたびれたわゝはよ準備手伝いや」

「そんな事言って、お前全然やってねえじゃんか！」

「はいはい、ウチも手伝いますゝ」

大介さんに突っ込まれて葵さんが宿の外へ出た。……あれ、開いてる扉の外からいい匂いがする。僕も外へ出てみると、そこには。

「あ、悟も起きたのね。今あんたの分も焼いてるからとりあえずこれ運んでっ」

と、渡されたのがバスケットいっぱいになっているパン………パン？

「シュレイナこれって…」

と、目の前で焼いているのは目玉焼きのようなもの、いや目玉焼きだった。

「何で僕らの世界のものが」

向こうからやってきたカネアさんはトマトやレタスやきゅうりの刻んだサラダを持ってきた。

「さあこれで全員分ね、中で食べましょ」

そしてみんなでイスに座って食卓を囲んだ。

「それじゃあ、いただきます！」

「「いただきます！」「」」

シュレイナの号令に合わせてみんなもいただきますをしてそれぞれパンやサラダに手を伸ばした。

「シュレイナ、なんで僕らの世界の朝食が……」

「ああこれ？」

と言って食べかけのパンを皿の上に置いて応えた。

「これはねおじいちゃんの部下が事前に人間界でどんなご飯を食べしているのかを調べてそれに合わせて作ったものの材料を各チームに手配しているの。それをあたし達が調理するのよ」

そんなコトまでできるんだ。じゃあこれも形は似てるけどレタスやトマトじゃないんだ。

「まあ実際の話、人間界の食物は大昔に天界から偶然その種が落ちて来てそれが育ったたり独自の進化を遂げたものだったと言う事もたまに聞くんね、似たようなものがたくさんあるのよ」

そうだったんだ、どうりで味もほとんど変わらないわけだ。

そうして僕らは食事を済ませて宿の外に出た。

「さて、昨日言ったとおり今日は属性別に分かれて訓練するわよ！
葵と陸斗は火の属性でクロードのところ、大介とアリシアちゃんは
風でマレーサとネルザね、じゃあ各自分かれて解散！後はよろしく
ね、行くわよカネア」

そう言ってシュレイナはカネアさんとどこかへ行こうとしていた。
あれ、僕は？

「シュレイナ、僕は？」

「悟君はわたしよ」

振り向くとそこには昨日のお風呂造りで水を入れていた人。

「えっと、コミルさん？」

「そ、シュレイナに任されたの。よろしくね！」

そう言ってコミルさんはニコツと笑うと付いてきてと、案内された。

そしてまたいつもの草原で修行をすることになった。

よろしくね！（後書き）

ちよつとキャラも多くなつてきて忘れがちなキャラの容姿や性格を詳しくかいてませんでした（汗）ので次回は格キヤラクターの紹介をしたいと思います。

感想まっています！！

キャラ紹介(改)

あらかわ
荒川 悟

今作品の主人公で、入学式の日に手違いで天界に連れて来られてしまった少年。12歳。勉強やスポーツはほとんどダメ。しかし魔法使いの才能を持ちその魔力は今のところ天界一。あとコントロールが一般人よりも格段に上級者だがそれを人間界で生かせることは無い。性格は大人しめで戦いはあまり好きなほうではない。だが天界に来てからは少しずつ自信を持ち始めている。

容姿のイメージとしては『ブレ〇ブ・ス〇ーリー』の主人公ワ〇ルみたいな感じ。

さいとう
佐藤 龍一

悟の親友で悟とは正反対の才能。12歳。成績優秀・スポーツ万能・おまけにイケメン。悟と同じ中学校に入学し悟の兄のような存在。本当は天界に連れて行かれるはずだった男の子。悟の親友なのにこれから出番が無いであろうキャラ確定。イメージは某野球漫画の背が小さい4番サード。

シュレイナ・ロベルト

悟のパートナー。ロベルト家の一族でありお嬢様。18歳。その祖父のグロツツは天界の王の中の一人。幼少の頃から祖父に魔法を叩き込まれ魔法学院は飛び級で卒業、その後は年に一度の戦い『魔法使いの闘い』では初参加以外は全て優勝。いきなり小型のハンマーを取り出して殴りかかったり、常に負けず嫌いで荒々しい性格はあ

るが本当は優しい性格の持ち主。要するにツンデレに近い。属性魔法は基本なんでも使えるが得意なのは『風』と『水』

イメージは無いが容姿は身長165、スレンダーなスタイルで髪は金のポニーテールに赤いリボンをしている。目は緑色、肌は白。衣服はへそ出しのタンクトップにショートパンツを穿いてその上から全身を覆う紅いローブに背中には金色の十字架が描かれている。

クロード・アーチェス

悟のもう一人のパートナー。シュレイナとはいとこにあたる。18歳。彼もまた幼少の頃からシュレイナと共に魔法を学び魔法は上級者だったが頭の方がちよつとあれな為、飛び級はせず普通に卒業した。性格は落ち着いているがシュレイナには振り回されてばかりいる。また悟の暴走した時の発言や神器にやたら詳しくったり謎が多い部分もあるキャラである。

容姿は身長は170、目は赤いBL〇A〇Hの志波〇燕のような感じ。服は黒のタキシードを戦闘用の服にしたようなものの上に蒼いローブを着て背中に金の十字架がある。得意な魔法は『火』と『雷』たまに『地』も使う。

グロッツ・ロベルト

天界の王の一人でシュレイナの祖父。65歳。孫娘には頭が上がりず特別扱いしている。今回の闘いでも悟たちの宿にはシュレイナ用のベッドがあったり、写真があったりとシュレイナを溺愛している。しかしその実力は本物、中でも『火』の魔法は歴代の王の中で右に

出る者はいない。派手なことが好きで登場する時や立ち去るたびに大きな魔法を使い周りに迷惑をかけている。イメージはダ○ブ○ド
ア校長。

バイザン

初めての敵。18歳。ここだけの話、魔法学園に居た頃はクロードにちょっかいをかけてそのたびに返り討ちにあっている。

シェリア

同じく初めての敵。17歳。特に設定はないが考える事は大体卑怯なこと。

みずむら
瑞村 こうすけ
耕介

悟と同じように人間界から来た子供。13歳。悟に不意打ちを喰らわせるが暴走した悟に成すすべなく負けた。

謎の少年

全てが不明の少年。年齢不明。一回戦では他の参加者の火の石を奪い脱落者を増やした。煙のように現れまた煙のように消える。悟の高い魔力に興味を持っている。

やまの
崎野 あおい
葵

悟と同じように人間界から連れて来られた子供の一人14歳。関西出身でバリバリの関西弁である。性格は大らかでかなりのお喋り。誰にでも人懐っこく特にシュレイナを先輩のような眼差しで見ても敬しているがシュレイナ自身は苦手な人種である。属性は『火』で

選んだ理由は「とりあえずカッコエエから」らしい。しかし中学では剣道部に所属しており戦闘においてはかなりの上級者、武器はシユレイナに選んでもらった刀。容姿は腰まである茶髪で長身。イメージとしては灼○のシャ○をもう少し大人にした感じ。

神室 かむろ 大介 だいすけ

悟と……以下省略。14歳。性格は冷静で淡泊。しかし柔道部に所属している彼は戦いに関しては率先して挑む。属性は『地』と『風』。容姿は黒短髪のコツい体格。武器は鎖つき鉄球ハンマー。イメージとしてはガ○ツのき○にくラ○ダーの髭をなくして若くした感じ。

クリス・アリシア

フランス出身の13歳。5歳の頃に日本に来てずっと日本暮らし。日本語は普通の日本人並みに話せる性格は温厚だが人見知りが激しくあまり自分の意見を言えない。『しかし一人になる』と言うキードには過剰に反応し周りから人が居なくなるのを嫌う。彼女の過去については後ほど。属性は『風』と『水』。武器は西洋風の弓矢。容姿は金髪ショートパーマで身長は悟よりも少し高い、目は青イメージとしてはISのシャ○です。

織田 おだ 陸斗 りくと

通称、第二の龍一。12歳だが大人びていて、武器を迷っていた悟に対し友達同然に話しかけ悟と打ち解けあった。性格は明るく活発で面倒見がいい。足が速くその特性を生かし手に装着できる短剣を武器に選んだ。属性は『火』と『雷』。容姿はグレーの長髪、身長は悟とほとんど変わらない。イメージとしてはアイ○ール○21のり○。

カネア・ナスラム

アリシアのパートナー。シュレイナの後輩にあたり、シュレイナを尊敬している。一回戦で火の石を三つ集めるものの謎の黒い煙に襲われ一つを奪われてしまう。もう一人のパートナーのカルマ・グレッタは黒い煙に挑むがその後消息は不明。

ネルザ・シークス

シュレイナの魔法学院の仲良しグループの一人で葵のパートナー。属性は『火』と『風』

マレーサ・エランド

同じくシュレイナの魔法学院の仲良しグループの一人で大介のパートナー。属性は『地』と『雷』

コミル・レニツカ

仲良しグループの一人で陸斗のパートナー。属性は『水』と『雷』。シュレイナに頼まれ悟の修行相手をすることに。

以後、男性パートナーはクロードとカルマ以外は出ないので説明はありません。あと魔法の属性は天界人は基本は全ての属性を使えます。上記に書いてあるのは得意な属性なのでその辺をわかってください属性にはそれぞれ相性がありジャンケンのようなもので、火↓風↓地↓雷↓水↓火。という具合です。

キャラ紹介(改) (後書き)

以上キャラの紹介でした。他にわからないことがあったら答えられる範囲で答えます。次回は悟君の修行に入ります。感想まっけます!!

おもしろいわね、君って

「さ〜とりあえず始めましょうか！」

始めるって言っても何をするんだろう？

「シュレイナから聞いてるけど悟君、あなたの魔力はグロツツ様よりも高いんだって？」

「はい、確か250だったかな」

「なるほどね〜そんじゃあ今回は攻撃や防御とかじゃなくて戦闘の補助に魔力を使う練習をしましょうか」

戦闘の……補助？

「それってどういう……」

「ん〜具体的に言うと……例えば属性が風を自分の周りに纏って移動してみたり空を飛んでみたり、私は水だからこういうのよね」

そう言うとコミルさんの足から水が噴射して飛び上がった。

「うわぁ！」

「あっははー！驚かせちゃったね、こんなふうには水を足の裏からだして空中を歩いてみたね」

ある程度歩くと水を弱めてコミルさんが降りてきた。凄いなあ、僕にもできるのかな。

「他にもいろいろあるんだけど、それは後で説明するわ、悟君、大事なのはイメージよ。両足から水が出るのをイメージしてね」

「わかりました」

僕はさっきのコミルさんのやっていたのを思い出してみた。えーつと水が思いつき……。。

バツシャーン！！

足から勢いよく水が出たので僕は地面に背中を強打して倒れた。

「痛ったたたた」

やっぱり上手くないや。

「あっははっやっぱり魔力が高くて初めはみんなそうだったわ、魔力の大きさがね。私も始めたばかりの頃はそうだったわ、魔力の大きさがね、そうね、魔力のコントロールよ」

コントロール……その言葉を聞いて僕は思い返してみた。そうだとコントロールだ、別に投げるわけじゃない、でも……あの感覚を思いながらやれば。

目を閉じ深呼吸をする。そうだと、的当てをするようなイメージで集中して……出る！

すると、少しだけ体が宙に浮いた気がした。いや、浮いてる！足の裏から水が出て、保ってる。

「コムルさん！やったよ！」

それを見ていたコムルさんは。

「凄いじゃな！こんなに早くコツを掴むなんて、やっぱり君は違うわね、他の子達と……じゃあそのまま徐々に魔力を上げてみて。水の量が多くなるはずよ」

「わかりましたっ」

僕はそのまま自分の中の魔力を出力を上げてみた。すると水は勢いを増して更に高く上がった。

「んゝこんなもんねゝそろそろ第二段階に行って見ましようか、悟君もう降りてきていいわよ！ってあれ？」

わぁこんなに高く……あれ？止まらない、水がどんどん出てくる。だめだ止めなくちゃ、そうだもっと集中して……止まれゝ止まれゝ……あれ？水は止まったけど何で下に行かないんだ？

「あちやゝまさかここまでやつちやうとは……」

僕の足元には……水柱が立っていた。僕がさっきまで出していた水だ、何で水に？

「あわわわわっ」

当然、ツルツル滑って体勢が整わない……あ、ダメだ、落ちた。

僕はそのまま、まっ逆さまに落ちていった。

「つたくもくしょうがないわねっと」

コミルさんが僕を受け止めてくれた。助かったくでもなんで？

「ホントにねく悟君。何で先走っちゃうかなく？」

先走った？僕は意味がわからなかった。

「無意識だったのね、それにしてもこんなの造っちゃなんて、やっぱ魔力ねく」

「コミルさん、これって」

「そうね、言わばこれが水の魔法の真骨頂っ自分の魔力を更に加えることで温度を下げて氷にするのよ、それを今から教えようと思っ
てたんだ・け・ど…ねく」

何かがっかりしている、僕悪い事しちゃったのかなあ？

「い、ごめんなさい」

「何謝ってんのよ！そりゃあこっちは教えたくてウズウズしてたのに悟君が一気に行っちゃうからさ、ちよつと物足りなさはあるけど・・・じゃあもう次ぎ行くわよ！」

「は、はい！」

やっぱりちよつと怒ってるかな。

「あっはは、おもしろいわね、君って」

コミルさんが最初にしたような笑顔になってくれた。よかった！怒ってないんだ。

「じゃあ次は上級だからね！がんなりなさいよ！？」

「はい！」

おもしろいわね、君って（後書き）

ここでも悟君はやってくれました、もう弱い主人公じゃないかな。最近そう思います。コミルのキャラがイマイチ定着しません、どうしたものでしょうか。次回もコミルと悟君の修行がしばらく続きます。感想待ってます！！

でもやるしかないんだ！

上級魔法……一体何をするんだろう。

「上級魔法、それは属性の混合よっ」

「属性の……混合？」

「そう、例えば私だったら得意なのは水と雷だけどどちらか片方の魔法にもう片方の属性を加えるの、そうすれば魔法はもっと協力になるわ」

えっとう魔法にもう片方を加える？

「君には口で説明するよりも実践でしたほうがいいわね、よく見て」

コムルさんは少し離れると両手を合わせて……

「魔力混合！クルセルド！」

するとコミルさんの腕から水の鞭が伸びたがその鞭はバチバチと音が鳴っていた。もしかして、雷の属性が混ざってる？

「どう？これで説明はいらない？こんな風に雷の属性をクルセルドに加えることで魔法を強化したの」

「それは別の魔法でもできるんですか？」

「そうね、大体の魔法で出来るわよ。加える属性を変えれば何通りも増えるし。ためしにやってみれば？」

僕はコミルさんがやっていたように真似して手を合わせてみる。

「魔力混合！クルセルド！」

呪文を唱えると僕の腕からもクルセルドが伸びた……が電撃を帯びたもののすぐに弾けて消えてしまった。

「あれっ!？」

それを見ていたコミルさんは。

「ダメダメ、加える魔力が多すぎるわ。それじゃあ魔法の方が消えてしまう、もう少し雷の方を抑えないと、はいっもう一度!」

……思ったより難しい。僕はもう一度手を合わせた。

「魔力混合! クルセルド!」

さっきよりも雷のイメージを少なくした。すると。

「それじゃあ、ただのクルセルドじゃないっ」

僕のクルセルドには雷が帯びてなかった。うーやっぱり難しい。

「よし、もう一度!」

僕はもう一度試みた、が、また失敗した。調節がどうしても上手くない。

それから何度も練習した、コミルさんも見本を見せてくれたが何故かできない。それからどれくらいが経っただろう……時計が無いから時間の経過がわからないや。そのとき視界が暗くなった。

「…………あれっ？」

「おっと!？」

コミルさんが僕の体を支えてくれた。

「無理しすぎよ、魔力は無限じゃないんだから、一度に大量の魔力を消費する魔力混合を使ったらすぐに空になるわよ、私でも使えるのは2〜3回程度。もうヘトヘトなんだから」

そういうコミルさんの息は上がっていた。気付かなかった、僕だったからこんなにも長く。

「とにかく、今日の修行は終わり！続きはまた明日ね」

「…………はい」

やっぱり上級魔法は難しい、シュレイナもクロードもこの魔法を使えるんだろな。どれくらい練習したんだろう。

「コムルさんは、魔力混合はどれくらいで使えるようになったんですか？」

「そうね、学院卒業試験がこの魔力混合だったんだけど……たしか、1ヶ月くらい？」

「……………」

1ヶ月！？そこまでするなんて、どうやってすれば。

「ちゃんと考えてあるわよ。私たちの場合は一日一回、魔力混合を使ったらその日の魔力を半分くらい消費しちゃうの、だけど悟君は第一段階をした上に何十回も練習してるんだから、そのうち覚えるようになるわよ」

「練習すればするほどに、わかるものなんですか？」

「どんな魔法だって練習は質より量が大事よ！だから魔力の高い悟君なら5日もあれば十分」

5日、まだこんな状態なのに5日で、出来るのかな。でもやるしかないんだ！

「それじゃあ今日のところは宿に戻りましょうか、みんなもそろそろだと思うし」

「は…い…」

すごく疲れた、宿に帰ったら…寝よう。もう何も考えなかった、ただ宿に帰る、それだけだった。気が付くと僕はコミルさんの背中の上だった。

「あ、気が付いた？ビックリするじゃない、歩きだしたと思ったら寝ちゃうんだもん。もうすぐ着くわよ」

目の前に宿が見えていた。

「ありがとうございます。コミルさん。もう降ります」

「ほいっ」

そして僕は宿の前で降ろしてもらい扉を開けた。

でもやるしかないんだ！（後書き）

悟君で女性におんぶしてもらうことが多いですね、なんだか羨ましいです（笑）

さて次回は他のみんなの修行の様子を見てみたいと思います。みんなはどんな修行をしていたのでしょうか？感想待ってます！！

絶対その言葉後悔させてやる！

「おお！悟、おかえり！」

部屋に入るなり陸斗が僕に気づいた。

「ただいま、陸斗。みんなはもう全員帰ってきているの？」

部屋を見渡すほとんどの人が帰ってきていた、でも。

「ああ、シュレイナさんとカネアさんはまだだ」

あの二人だけはまだだった。

「それより悟！お前はどんな修行をしたんだ？俺ははスゲー技が出るようになったんだ！」

それから陸斗は修行の内容を僕に話してくれた。

（陸斗の視点）

俺は葵さんとともにクロードさんに火の属性の使い方を教わっていた。

「そんなじゃあまずは昨日もやってたと思うが自分の武器に属性を加える魔法をおさらいしようか、と言っても昨日で大体わかってるかな。とりあえずやってみてくれ」

「わかりました」

「ほな、先にウチからやるわ」

葵さんは鞘から刀を抜くと構えて力を込めた。

「はあああああ！」

すると刀身が炎を帯びたんだ。

「すげー、それって熱くないんですか？」

「ん？これか？自分の魔力やもん！熱ない熱ない」

葵さんはそのまま炎の帯びた刀の峰を肩に担いだ。本当に熱くないんだ。

「最初からここまで出来るのか、すっかり自分の物だな葵」

「あ、そうですかあ？ おおきに」

葵さんは上機嫌だった。よし俺も！

「じゃあ次は俺行きます」

俺も手にはめている短剣を体の正面に出し力を込めた。

「はああああ！」

そして俺の武器にも炎が帯びたと言うよりは灯った。葵さんのよりも小さいなあ。けどクロードさんは

「うん、二人とも上出来だ！ かしなあ陸斗、何故お前の炎は小さいか…わかるか？」

「えっと、俺の魔力が足りないから？」

それならもっと魔力を……

「いいや、もっと単純な話だ。その武器は炎の属性とは相性はいいんだが、違う属性の方がもっと相性がいいんだ」

「相性？その属性って」

今更かよ！？けっこうこの武器気に入ってたのに、俺には合わないのか？俺が軽く落胆しているときに

「それは雷だ」

……え？それってつまり。

「今回は炎属性で集めたがお前には雷の属性で修行してもらう、ついでに俺も得意なのは火と雷だ」

よかった！この武器、まだ使えるんだ！しかももっと強くなるなんて。

「ってゝ事で今回はお前ら別々で修行だ、どちらも俺が見るからな。とりあえず二人には課題をだす」

「課題ってなんです？」

「まず葵、お前の『炎刀灼刃』えんとうしゃくばは魔力を込めれば込めるほどにその刀身は力を増して硬いものが切れるようになる。今から順番に天界に存在する鉱石を用意するからそいつらを切っていけ、真っ二つになるようにな」

「了解です！」

「次に陸斗。お前は……………」

俺だ、一体何をするんだ？

「俺とサシで勝負だ」

「…………え？」

俺とクロードさんが一対一で？無理だそんなの、でも。

「何ですか！？」

「お前らを見てるとな、葵は課題を与えれば一人でこなして成長していくタイプで陸斗、お前は実践形式で体で覚える方が効率的だと判断したからだ」

そうか、でもこれはチャンスだ！クロードさんと戦えるなんてこんないい実践は無いな。

「とりあえず今回は雷の属性をその短剣に込めて戦う修行だ。俺も魔力は半分以下で戦ってやるからどこからでもかかって来い」

魔力を半分以下！？そんな、仮にも一回戦を超えて来た奴に半分以下で戦えるのか？そんなのアリかよ！？

「じゃあ、俺は初めから全力で行きますよ？」

「ああそのほうがおもしろい」

「絶対その言葉後悔させてやる！」

「来い！」

絶対その言葉後悔させてやる！（後書き）

って事で修行というより修行開始までを書くことになりました、陸斗はクロードに勝つことが出来るんでしょうか？そして葵は？次回も陸斗の視点で書いていきます
感想待ってます！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0003y/>

ウィザード・テイルズ

2011年12月20日22時48分発行